学内広報

2017.4.24 no.1495

入学式で祝辞を述べる大隅良典先生（4 月 12 日）

平成29年度役員等の紹介
平成28年度卒業式・学位記授与式
平成29年度入学式・大学院入学式

3本立てミニ特集
「東京大学広報戦略2020」／URA認定制度／戦略的パートナーシップ大学プロジェクト

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

平成29年度役員等の紹介

平成29年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長
(任期)平成27年4月1日～平成33年3月31日

五神 真

理事・副学長

福田 裕穂
(担当)総務、入試、産学連携

石井 洋二郎
(担当)教育、学生支援、評価

羽田 正
(担当)国際、IR

小関 敏彦
(担当)研究、資産・施設、産学協創研究

松木 則夫
(担当)財務、渉外、奨学厚生、男女共同参画

理事

境田 正樹
(担当)コンプライアンス、監査、病院

戸渡 速志
(担当)事務組織、法務、人事労務、広報、環境安全

監事

澤井 憲子

服部 彰

大学執行役・副学長

相原 博昭
(担当)財務改革、学術研究長期戦略

久留島 典子
(担当)学術情報基盤整備

光石 衛
(担当)研究力強化、環境安全、研究倫理

渡部 俊也
(担当)産学官協創

副学長

田中 純
(担当)人文社会科学振興

千葉 学
(担当)キャンパス・施設

関村 直人
(担当)国際、日本語教育

園田 茂人
(担当)国際、アジア地域留学生戦略

吉村 忍
(担当)産学協創基盤強化

副理事

奥抜 義弘
(担当)柏地区整備、柏地区事務機構長、イノベーションコリドー

梶 正治
(担当)男女共同参画

紺野 鉄二
(担当)業務改革、文書館事務総括、周年事業(140周年、150周年)

鈴木 敏人
(担当)経理・調達、研究費・研究不正対応

関谷 孝
(担当)スポーツ先端科学研究振興、広報戦略

平野 浩之
(担当)財務制度改革

総長室顧問

杉山 健一

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

沖 大幹
(担当)国際協力

橋本 和仁
(担当)科学技術制度

藤原 帰一
(担当)国際関係

総長特任補佐

有馬 孝尚
(担当)IR、イノベーションコリドー

伊藤 たかね
(担当)学部教育国際化

大江 和彦
(担当)病院担当補佐

川﨑 雅司
(担当)研究力強化戦略

坂田 一郎
(担当)総務補佐、運営企画補佐

佐藤 仁
(担当)国際広報、総務補佐

出口 敦
(担当)柏地区整備

中津 健之
(担当)研究企画

難波 成任
(担当)EMP

新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新大学執行役・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

すべての大学を支える人とともに

理事・副学長

福田裕穂

Hiroo Fukuda

昭和52年3月　本学理学部生物学科卒業
昭和57年3月　同理学系研究科博士課程修了（理学博士）
平成元年2月　東北大学理学部助教授
平成7年10月　本学理学部教授
平成13年4月　同総長補佐
平成19年4月　本学生命系教育支援ネットワーク長
平成21年4月　同評議員・理学系研究科副研究科長
平成25年4月　本学副学長
平成27年4月　本学大学院理学系研究科長・理学部長
平成27年4月　本学生命科学ネットワーク長
専門分野：植物生理学、特に植物のかたち作りの分子機構
研究内容：1) Fukuda, H.: Signals that control plant vascular cell differentiation. Nature Rev. Mol. Cell Biol. 5: 379-391, 2004.　2)Oda, Y. and Fukuda, H.: Initiation of cell wall pattern by a Rho- and microtubule-driven symmetry breaking. Science 337, 1333-1336, 2012.
趣味：読書、絵画鑑賞、釣り

新年度より、総務、入試、産学連携担当の理事・副学長に就任することになりました。以前、入試担当の副学長をしていましたので、入試に関しては返り咲きですが、他の職務は初めてです。本年3月までは、理学系研究科の研究科長として、基礎科学を中心として，教育・研究・社会貢献に資する環境整備をおこなってきました。これが、基礎科学の重要性を訴える国立大学理学部長会議の声明にも反映されました。また、多くの部局の先生方ともお付き合いさせていただきました。こうした運営の過程で東京大学の知の豊かさを実感しましたし、その蓄積の歴史にも驚嘆いたしました。

国の財政の悪化、少子・高齢化、国際情勢の不安定化など、大学を取り巻く状況は芳しくありません。しかし、こういうときだからこそ、東京大学は困難な状況を打開する力をもった人材を育成する必要があります。また、大学自らの先端的な知や深遠な知を研究コミュニティーや社会に発信し、より良い社会を作るための契機としていくことも重要だと思っています。一方で、こうした東京大学独自の取り組みに加え、多くの大学と歩調を揃えた変革も必要ではないかと思っています。

今後、総務、入試、産学連携担当という職務を通じて、皆様と共に、東京大学の教育・研究や知の発信の改善に向けて努力していく所存です。忌憚のないご意見や批判、さらには提案などを頂きますと幸いです。

ビジョン実現の加速のために

理事・副学長

小関敏彦

Toshihiko Koseki

昭和56年3月　本学工学部金属工学科卒業
昭和58年3月　本学工学系研究科修士課程修了（金属工学）
昭和58年4月　新日本製鐵（株）入社
平成６年5月　マサチューセッツ工科大学博士課程修了（Sc.D., 材料工学）
平成16年10月　本学大学院工学系研究科教授
平成23年4月　本学総長補佐
平成24年4月　本学大学院工学系研究科副研究科長
平成25年10月　本学総長特別参与
平成26年4月　本学副学長
平成27年11月　本学大学執行役・副学長
専門分野：金属材料工学、接合工学
研究内容：1) Koseki, T., Inoue, J. and Nambu, S., “Development of Multilayer Steels for Improved Combinations of High Strength and High Ductility”, Mater. Trans., 55 (2014): 227-237　2)T. Niino, J. Inoue, M. Ojima, S. Nambu and T. Koseki, “Effects of Solute Carbon on the Work Hardening Behavior of Lath Martensite in Low-Carbon Steel”, ISIJ Int’l 57 (2017): 181-188

このたび理事・副学長を拝命いたしました。担当は研究、資産・施設、産学協創研究などですが、執行役・副学長として関わってきた卓越大学院、教員人事制度、等にも継続して取り組みます。

研究力の強化には、法人化後に進んだ若手研究者の雇用不安定、研究者の時間劣化、職員ポスト凍結による研究支援の低下など、様々な課題の解決が不可欠であり、この2年間、ビジョン2020の下で、それらの改善や制度改革に取り組んできましたが、3年目の今年はそれらを更に加速したいと考えております。また、総合大学の強みを活かし、様々な社会課題の解決への貢献や新たな学術や価値の創造につながる多様な分野融合や組織連携、すなわち、部局間連携や全学的なネットワーク、特定研究開発法人をはじめとする他機関との連携、イノベーションコリドー、産学協創などを様々な形で支援する仕組みを整えたいと思います。スペースや建物はこれらの研究活動の基盤として効率的な運用が重要ですが、同時に、増大する維持管理費への対応や大学経営資産としての活用なども視野に、透明性を保ちながら多面的に取り組んでいきたいと思います。

いずれも部局のご理解やご協力を得ながら誠意を持って進めたいと思いますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

ワークライフバランス WLB改善と生産性向上が必須

理事・副学長
松木則夫
Norio Matsuki

昭和49年3月　本学薬学部卒業
昭和54年3月　本学大学院薬学系研究科博士課程修了
昭和54年4月　本学薬学部助手
平成元年11月　本学薬学部助教授
平成9年5月　本学大学院薬学系研究科教授
平成28年6月　本学政策ビジョン研究センター特任教授
専門分野：薬理学、神経科学
研究内容：1) Sasaki, T. et al., "Action potential modulation during axonal conduction." Science, 331 (2011): 599-601. 2)Koyama, R. et al. "GABAergic excitation after febrile seizures induces ectopic granule cells and adult epilepsy." Nature Med., 18(2012): 1271-1278.
趣味：ステンドグラス、料理

3年前に私的な理由で薬学系研究科を早期退職しました。人生観が変わり、それまで見えなかったものが見えるようになる経験でした。縁あって昨年6月に政策ビジョン研究センターの特任教授として東京大学の男女共同参画事業のお手伝いを始め、このたび理事・副学長を務めさせて頂くことになりました。財務、渉外、奨学厚生、男女共同参画などを担当いたします。政府は「働き方の改革」を推進していますが、大学教員のワークライフバランス（WLB）については置き去りの感があります。実験系の業績は研究にコミットできた時間に概ね比例しますが、政府の委員会や審議会、さらには学会、大学や部局の運営に時間が取られ、そこにライフイベントが重なれば、多くを犠牲にしなければなりません。評価のための会議や書類作成なども増えWLBは悪化の一途です。しかし、長時間働いても研究業績の尺度で見ると諸外国の大学教員に比べて生産性は低いのが現状です。効率的な大学運営や研究・教育のサポート体制を充実させ、教員のWLBを改善しつつ生産性を上げることが必須で、それが研究や教育の継続的な向上や女性が活躍できる大学の構築に繋がると思います。私自身は今まで大学の運営に携わってきませんでしたが、エフォート率が高い利点を活かして五神総長を全力で支えていきたいと思います。どうぞよろしくご指導・ご支援をお願いいたします。

卓越した研究環境を目指して

大学執行役・副学長
光石 衛
Mamoru Mitsuishi

昭和54年3月　本学理学部卒業
昭和56年3月　本学工学部卒業
昭和58年3月　本学大学院工学系研究科修士課程修了
昭和61年3月　本学大学院工学系研究科博士課程修了
昭和61年4月　本学工学部講師
（昭和62年10月）　ドイツ・フラウンフォファー研究所研究員（～昭和63年10月）
平成元年4月　本学大学院工学系研究科助教授
平成11年4月　同教授
平成26年4月　同研究科長・本学工学部長
専門分野：機械工学（バイオメディカルロボティクス、生産工学）
研究内容：1) Mamoru Mitsuishi, et al., "Master-slave robotic platform and its feasibility study for micro-neurosurgery," International Journal of Medical Robotics and Computer Assisted Surgery, 9 2 (2013):180-189. 2) Mamoru Mitsuishi, et al., "Biomanufacturing," Manufacturing Technology, 62 2 (2013): 585-606.
趣味：写真、ドイツワイン

卓越した研究環境を目指して

このたび、大学執行役・副学長を拝命いたしました。この一年、研究力強化・環境安全・研究倫理を担当し、TSCP、総合技術本部、環境安全本部を所掌することとなります。

過去3年間は工学系研究科長・工学部長として、国内外に於ける本学の研究力の一層の強化を目指し、「研究科長表彰」や「戦略的サバティカル制度」、「Asian Deans' Forum」をはじめとする諸施策を推進してまいりました。これからは大学本部においてその経験を生かして貢献をさせていただく所存です。

東京大学には、日本における最優秀層の頭脳である学生、研究者が集っております。知的好奇心に溢れるこれら学徒達の研究を如何に円滑にステップアップさせていくかが緊要な課題と言えます。しかし、現実には研究者を取り巻く種々の環境の劣化、実社会で活躍するためのキャリアパスが必ずしも見えない、現今の就職活動にあまりにも多くの労力を割かざるを得ない状況にあるなどの事由により、「不完全燃焼」のメカニズムが随所に存在しております。この度の私の使命はその不完全燃焼のメカニズムを如何に減じて研究力の強化を図るかということに尽きるかと思います。そのためには環境安全の整備、研究倫理の徹底はもとより、産業界や社会との連携を推進する視点も肝要と考えます。全学の俊英のお力をお借りして尽力したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

グローバル戦略としてのパートナーシップ大学

副学長
関村直人
Naoto Sekimura

昭和56年3月　本学工学部卒業
昭和61年3月　本学大学院工学系研究科博士課程修了
昭和60年10月　日本学術振興会特別研究員（～昭和61年12月）
昭和62年1月　本学講師
平成元年4月　本学助教授
平成12年3月　本学教授
専門分野：システム安全学、システム保全学、品質マネジメント学
研究内容：1) Sekimura, Naoto. Understanding and Mitigating Ageing in Nuclear Power Plants. Edited by Philip Tipping, Cambridge: Woodhead Publishing, 2010 2) Alshaketheep, Tariq. Murakami, Kenta. Sekimura, Naoto. "Effect of insulator environment on thermal ageing estimations for ethylene propylene rubber insulated nuclear power plant cables", Journal of Nuclear Science and Technology VOL. 53, NO.9 (2016): 1366-1370.
趣味：音楽・美術鑑賞

グローバル戦略としてのパートナーシップ大学

海外の限られた大学との戦略的パートナーシップは、研究型総合大学としての本学の特徴を生かした先端的な学術交流を基幹として、産業界や研究機関をも巻き込んだネットワークを発展させるものである。また大学院及び学部学生の交流を効果的に促進するなど、教育プログラムを質的にも量的にも高めていくために、組織としての戦略性を持った関係を構築することをめざしている。教員・職員・学生の流動性を拡大し、国際共著論文としての共同研究成果発信やディシプリンを超えた融合的な課題設定とその解決への道筋を通じて、グローバル社会へ貢献していくことは、本学の国際的プレゼンス向上につながるものとなろう。

学部生を中心に学生・若手の海外体験や研修、留学を体系的にサポートする仕組みを導入して、これらとバランスをとりつつ海外からの学生・研究者の受け入れを順次拡大していくことが望まれている。本学には、昨年11月時点で3,700人を超える学生が学部と大学院の学生・研究生として学んでいる。さらにサマープログラムなどの短期プログラムや各種シンポジウムで来学する学生や研究者は極めて多い。「非英語圏における研究型総合大学のグローバルキャンパスモデルの構築」を進める中で、国際発信の重要性は言うまでもない。日本語教育の質と幅を充実させ、効果的に発信を進めることによって、魅力ある東京大学をサポートする施策の基盤形成を確実なものとしたいと考えている。

国際人流から「知」を練り上げる

副学長
園田茂人
Shigeto Sonoda

昭和59年3月　本学文学部社会学科卒業
昭和61年3月　本学大学院社会学研究科社会学（A）コース修士課程修了
昭和63年4月　本学文学部助手
平成2年4月　中央大学文学部専任講師
平成17年4月　早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授
平成21年4月　本学大学院情報学環・東洋文化研究所教授
平成29年4月　本学東洋文化研究所教授、副学長（国際担当）
専門分野：比較社会学、アジア研究
研究内容：1) 園田茂人・蕭新煌編『チャイナ・リスクといかに向き合うか』東京大学出版会、2016年　2) 園田茂人編『連携と離反の東アジア』勁草書房、2015年
趣味：家族と外食すること、くらいでしょうか

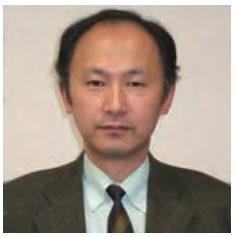
2009年、19年ぶりに母校に呼んでいただいてから、ずっと学生の国際的な流動をテーマにしてきました。

学際情報学府のアジア情報社会コース（授業は英語のみで行われています）の運営に関わる中で、日本人学生の動きが活発でないことに気づき、日本学術振興会の大航海プログラムやアジアアフリカ学術基盤形成事業を利用して、学生の流動性を高めようとしてきました。ところが、こうした枠組みを利用して海外に行こうとするのは留学生ばかりで、日本人学生はなかなか反応してくれない。大学院レベルで突然、学生に「海外に行け」といっても対応できない、というわけです。

そこで最近では学部生も含めた国際的流動性を高めることに、精力を注ぎつつあります。全学交換留学制度（USTEP）の拡大・充実や、休暇を利用しての国際短期プログラムの開発・実施。東洋文化研究所を拠点にした国際総合日本学（Global Japan Studies）でも、サマープログラムを開始しました。最近の私の時間は、これらの活動に充てられることが多く、実際、海外の協力者と情報共有するだけでも、膨大なエネルギーが必要とされます。

とはいえ、本学の学生諸君が若いうちに海外を経験しておけば、海外の研究者や実務家と臆することなく交流することができるようになり、これが結果的に、本学の基礎体力を強化することに繋がります。与えられた任期中に、国際人流から「知」を練り上げるインフラ作りに貢献したいと思っています。

産学協創基盤強化に向けて



副学長
吉村 忍
Shinobu Yoshimura

昭和62年3月　本学大学院工学系研究科原子力工学専攻博士課程修了、工学博士
昭和62年4月　本学工学部専任講師、助教授
平成4年6月　本学人工物工学研究センター助教授
平成6年4月　独シュツットガルト大学材料試験研究所客員研究員
平成7年4月　本学大学院工学系研究科助教授
平成11年4月　本学大学院新領域創成科学研究科教授
平成17年11月　本学大学院工学系研究科教授
平成21年4月　本学総長補佐
平成24年4月　本学広報室長
平成26年4月　本学大学院工学系研究科副研究科長
平成27年4月　本学教育研究評議員
専門分野：計算力学、知的シミュレーション学、システムデザイン学
研究内容：1) Yoshimura, Shinobu, Hori, Muneo and Ohsaki, Makoto, "High Performance Computing for Structural Mechanics and Earthquake / Tsunami Engineering", Springer, 2015.　2)吉村忍・関東康祐編「リスク活用のための確率論的破壊力学技術　ー基礎と応用ー」、日本溶接協会, (2012)
趣味：うた、料理

この度、副学長を拝命いたしました。これまで本部では総長補佐、広報室長として係らせていただきましたが、今回は「産学協創基盤強化」という役目をいただき、現在、他の役員の方々とも意見交換をさせていただきながら、具体的にどのような視点でどのように取り組むべきか模索しています。私は、日本学術会議において、「知の統合」や「巨大複雑系社会経済システムの創成力」という議論に深く係り、現代社会をいかに捉えるべきか、を学ばせていただきました。一方、総長補佐、広報室長時代に役目の遂行と同時に、東京大学の複雑システムとしての特徴についてもいろいろと気づかされ、それらを理解しながら進めないといけないことを実感したところです。

厳しい国の財政状況の中にあって、知の協創の世界拠点として、それに相応しい学術振興と国際貢献、社会貢献をしていくために、様々なセクションとも協力・連携していくことが求められていると思います。産学協創はその一つの有力なツールとして生み出され期待されているのだと思います。ただし、それをどうやって実現し、東京大学の知をより活かして行くか、そのための先進事例づくり、汎用的なルールや仕組みづくりが期待されているのだと思います。東京大学の知の伝統と蓄積を活かしつつ、東京大学の複雑システムとしての特徴を踏まえながら、東京大学の発展と、国際市民社会へより一層貢献していくために微力ながら尽くしていきたいと考えています。

男女共同参画を推進

副理事
梶 正治
Masaharu Kaji

平成17年4月　本学海洋研究所総務課長
平成18年10月　本学工学系・情報理工学系等総務課長
平成21年4月　本学人事部労務・勤務環境課長
平成24年4月　本学環境安全衛生部長・環境安全本部副本部長
平成28年4月　本学大学院工学系研究科ポスト「京」プロジェクト重点課題⑥事務局長
趣味：家庭菜園

このたび、男女共同参画担当の副理事を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

本学では、グローバル化が加速する中で最高水準の研究・教育の一層の向上のために多様な人材の活躍が求められ、男女共同参画の推進は重要な課題となっています。

これまでも様々な取組みが実施されてきておりますが、中でも女性教員、女子学生の比率は低位であるなど、現状では目途とするところには至っていません。

本学の掲げる第3期中期目標・中期計画により、組織的に女性教職員の割合を高めていくための諸施策が進められていますが、性別等にかかわらず多様な人材が活躍することのできる教育研究環境の整備、改善に取組むためには、教職員、学生等の構成員のご理解とご協力のもとにさらなる推進が急務です。

「東京大学ビジョン2020」におけるアクション4の③では、「構成員の多様化による組織の活性化」が謳われており、男女共同参画の取組みを通じて構成員の多様性の向上などのために尽力してまいりたいと存じますので、皆様方のご指導とご支援・ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

退任の挨拶

※写真は、3月31日、安田講堂正面入口にて、退任された理事・副学長の3先生を花束と拍手で送り出した際のものです。

このたび退任された理事・副学長、監事、副学長、副理事の退任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

大学に対する熱い思いに励まされながら

前理事・副学長　古谷 研

この3月末をもって2年間務めました理事・副学長を退任いたします。在任中、本部並びに各部局の皆様には大変にお世話になりました。心より御礼申し上げます。五神真総長の新体制のもとで、1年目は国際と病院を、2年目は財務と渉外を主担当とし、情報システムや生命系学術も担当させて頂きました。いずれの分野についても、社会の中における大学のあり方を考えた2年間でした。世界のトップ大学の多くは、強みを伸ばすことによって卓越性を追求して他大学との差別化を図るような経営方針のもと、優秀な学生の獲得競争を展開しています。こうした選択と集中を進める状況から、大学が置かれている厳しい環境と、財務基盤の強化に努める姿を垣間見ました。

我が国においても国立大学の置かれている環境は変化しています。従来は、決められた「枠」の中でどう運営するかを考えれば良かったのでしたが、これからは大学が何をするか/したいかを主体的に決めて、そのために「枠」自体を変える方向へと舵を取ることになります。そうした状況を踏まえて、「東京大学ビジョン2020」のもと、予算配分の透明化の推進や財源の多元化に向けた取り組みに執行部として参画できたことは私にとって大変貴重な経験となりました。こうした活動を通して強く感じたことは、教職員の方々の大学を愛する気持ちであり、大学の未来に対する熱い思いです。こうした皆様の思いに励ましを頂きながら職務を遂行することが出来ました。あらためて感謝申し上げますとともに、「知の協創の世界拠点」に向けて東京大学がますます発展することを祈念して、退任の挨拶といたします。

「東京大学ビジョン2020」の進展に期待しています

前理事・副学長　保立和夫

五神総長の執行部にて、最初の2年間を理事・副学長として務めさせて頂きました。1年目は研究、施設・資産、産学連携を担当し、2年目は総務、研究、特定研究成果活用支援事業を担当させて頂きました。この間、多くの皆様に大変にお世話になりました。誠に有り難うございます。

研究担当では、カブリ数物連携宇宙研究機構、Center of Innovationプログラム、リーディング大学院プログラム等の大型の研究プログラムをはじめとした活気溢れる様々な活動を目の当たりにして、東大の高い研究力を実感させて頂きました。スーパーカミオカンデの成果による梶田先生のノーベル賞ご受賞をお祝いできたのは、大変に嬉しいことでした。産学連携では、特定研究成果活用支援事業を具体的にデザイン・実装してゆく場面に立ち会わせて頂きました。東大独自の申請が認可されて出資事業会社が立ち上がり、投資が開始されたことを、大変に有り難く思っております。施設・資産担当としては、大規模大学での建設に於けるスケールと複雑さとを体験致しました。総務は、正に多様な角度からの対応が必要な担当でした。

「東京大学ビジョン2020」に沿った改革が進展し、大学でしかできない貢献がより豊かに実現されてゆくことを祈念致しております。

感謝のことば

前理事・副学長　**南風原朝和**

五神総長のリーダーシップと、役員、研究科長、研究所長、関係の本部長、室長、そして部課長をはじめとする教職員の皆様の強力なサポートのおかげで2年間の理事・副学長（学生支援、入試、環境安全、男女共同参画）の任務を全うできましたことに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

たくさんの事柄に関わらせていただき、貴重な体験と勉強をさせていただきました。メディアへの対応のための役員研修では、「謝罪が上手」と持ち上げられ、妙な自信を持ちましたが、実際にはそのスキルを発揮する機会がなく、何よりでした。

貴重な体験のひとつに東京六大学野球秋季リーグ開幕戦での始球式がありますが、そのときのストライク投球が評価されて（？）、4月からは運動会理事長を拝命することになりました。また、昨年10月に新設された高大接続研究開発センターのセンター長の役目を相田仁・初代センター長から引き継ぐことになりました。それぞれ、東京大学の学生支援と入試に、これまでとは異なるかたちで関わらせていただくことになります。

引き続きのご支援、ご協力をなにとぞよろしくお願いします。

長期的視野とリスク

前副学長　**神谷和也**

私は、この度2年間の副学長の職務を終え、神戸大学経済経営研究所に移りました。在任中は、多くの方々にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

私は、財務（特に物件費配分制度の改革）に携わりました。透明かつ優れた制度ができたと考えています。今後は、いかに運用するかが問題になります。まず重要なのは、長期的視野だと思います。将来得られる収入増の甘い見通しの下に、多くの予算を配分してしまうと、何年か後の予算配分を大幅に減らすことになります。また、リスクも重要になります。つまり、将来の収入は増える可能性、あまり変わらない可能性、減る可能性があるということです。楽観的な見通しの下に配分せず、いくつかの可能性がある（リスクがある）ことを考慮にいれて配分する必要があります。任期が短い場合には、とかく短期的視野で行動しがちです。しかし、将来世代のために、長期的視野に立ちリスクを考慮して運営していただければと思います。私はすでに東大を離れましたが、遠くから東大の将来を見守りたいと思います。

Act Local, Think Global - 副学長退任のご挨拶

前副学長　**武田展雄**

2年間副学長として、「柏地区整備」と「社会連携」を担当させていただき、充実した日々を送ることができました。「柏地区整備」については、極めてダイナミックな2年間でした。梶田先生のノーベル賞受賞は、連帯感を深めてきた柏地区の教職員・学生にとって誇るべき事で、皆我がことのように喜びました。一方、つくば研究機関との連携を深めるTIAに東大が参加することをきっかけに、つくば-柏-本郷イノベーションコリドー構想が具体化し、産総研・東大OIL（Open Innovation Lab）、産総研AIグローバル拠点、産学協創プラットフォーム拠点などが次々と発足しつつあり、その一端に貢献できたことは嬉しい限りです。地元を大切にするローカルな柏キャンパスがグローバルに展開していくことを切に期待しています。「社会連携」については、MOOC（Massive Open Online Courses）で東大らしく、かつ、国際的にもユニークなコースの開設に努めましたが、まだ道半ばです。体験学習プログラムは、卒業生室のバックアップを受けた海外体験と国内での様々な社会体験がミックスされており、学生諸君が嬉々として成長してくれる喜びを味わいました。これらすべて、協力いただいた東大の職員・特任職員の方のご努力によるものであり、深く感謝いたします。

開かれた複合システムとしての国立大学へ

前副学長　**吉見俊哉**

2度目の副学長退任となります。思い返せば総長補佐も有馬総長の下と蓮實総長の下の2回やらせていただいているので、私は何でも反芻しないと前に進めない人間なのかもしれません。担当のEMP室で十分にお役に立てたか心許ないのですが、国立大学が国家財政の下で専門研究と教育、教養教育を単線的に実施する組織から、むしろ産業界、世界、地域、複雑化し流動化した学問、人々の多様なキャリアのいずれとの関係においても開かれた複合的な知のシステムに進化していかなければならないことは十分に理解しています。東京大学は、そのような進化の基礎となる諸要素をすでに備えていますが、それらを統合し、有機的に発展するシステムとするには至っていません。私自身は、この9月からサバティカルをいただいてハーバード大学に行き、あちらで2学期間、学部と大学院を教えてきます。トランプ政権の米国に行くのは複雑な心境ですが、虚心坦懐に東大とハーバードではどこがどう違うのかを自分の肌感覚で理解してきたいと思っています。そこで発見できたことが、引き続き五神総長をはじめ執行部の方々のお役に立つなら誠に幸いです。

平成28年度卒業式

平成28年度卒業式が、3月24日(金)に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部（理系学部）と第二部（文系学部）に分けて行われ、第一部は9時15分、第二部は11時30分に開式しました。音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「交響曲第29番 第1楽章」の演奏後、総長をはじめ、来賓の方々、理事・副学長、理事、各学部長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各学部の卒業生代表に、順次、学位記が授与され、卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代（第一部：農学部 中嶋樹理（なかしまじゅり）さん、第二部：教育学部 神田淳希（かんだじゅんき）さんから答辞が述べられ、式を終えました。

平成 28 年度卒業式 総長告辞

東京大学総長

五神 真

本日ここに学士の学位を取得し、卒業式を迎えられた10学部、3,080名の卒業生の皆さんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。また、この日にいたるまで長い年月、皆さんの成長を支えてこられたご家族の皆様方のご苦労に対し、敬意と感謝の意を表します。本学が送り出した卒業生は皆さんを含め合計279,902名となりました。

近代化を進めた第 1 の 70 年と先進国に成長した第 2 の 70 年

東京大学は東京開成学校と東京医学校を合併して創設されました。その源流である蕃書調所（ばんしょしらべしょ）は 1857 年、種痘所は 1858 年と、その設置は江戸時代にさかのぼります。東京大学の設立は1877年で、本年4月に140周年を迎えます。私はこの140年の歴史を、終戦を挟んで前後70年に分けて考えています。そのそれぞれのスタート時点において、進むべき方向ははっきりしていました。

前半の70年は明治期に入り、西洋諸国と伍して対等な国となるために、西洋の近代化の成果を一気にとりいれた国づくりが求められました。その仕組み作りと人材養成の中枢的役割を担うことが創設の目的でもあったからです。1886 年（明治 19 年）に公布された帝国大学令によって、東京大学は帝国大学に改組され、様々な学部を備えた現在の総合大学としての原型が整いました。

後半の70年の始まりは、戦後の焼け野原から新たな民主国家を創り上げることでした。そしてその70年の間に、科学技術はめざましく発展し、経済社会の大きな発展とグローバル化をもたらしました。その中で日本は工業立国をなし遂げ、先進国の一角としての地位と平和で安定した社会を獲得しました。しかし同時に、拡大した人類の活動は、環境の劣化や地域間格差など地球規模の課題を生みだし、近年、それが拡大し深刻さを増しています。

今年から、次の第3の70年が始まります。昨年2016年は中国の金融不安から始まり、各地におけるテロ、イギリスの国民投票によるEU離脱、アメリカ大統領選挙など、人類全体の協調と調和という理想に逆行する大きな動きが続いています。宗教的な対立や国際紛争の複雑化は加速するばかりで、これまで人類社会の発展を支えてきた、資本主義や民主主義などの基本的な仕組みが十分機能していないのではないかとすら感じられます。個々の人々が、自由で、意欲を持って活動し、それが結果として人類全体の豊かさにつながるような新しい仕組みを創りだすにはどうすれば良いのでしょうか。

ここで大切なことは、知の力を放棄するのではなく、その力を信じ、国境を越えて協力しあうことです。様々な立場の人々と未来のためのビジョンを共有し、その輪を広げるための行動を起こすことです。これは、ネット上で広がる反射的で衝動的な共感ではありません。「知性に支えられた真の共感」、それを作りだし、拡げていくことなのです。

東京大学を本日卒業する皆さんこそが、そ

の担い手とならねばなりません。東京大学で学んだ知を最大限活用して、次の70年の人類社会のあるべき姿を描き、それに向けた道筋をつけるために何をすべきかを考え、実際に行動を興してください。「次の70年」は、卒業生の皆さんが社会に出て活躍し、齢を重ね、そして次の世代に社会を受け継ぐ大事な期間です。

さて、よりよい社会を作るための基本は人々の心と体の健康にあります。東京大学は、昨年（2016年）5月にスポーツ先端科学研究拠点を開設致しました。この拠点は、本学が様々な分野において培ってきた最先端の学理をベースとして、健康寿命の延伸、障がい者のQOL、すなわち生活の質の改善、アスリートの競技力の向上などの課題に分野横断的に取り組むことを目的としています。拠点にはすでに、15の部局の約50におよぶ研究室から、様々な分野の研究者が集っています。この活動は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを1つの通過点と捉えており、スポーツの振興や研究を行う各種の団体とも連携し、互いに協力して研究を進めています。そしてその成果をもとに、すべての人々が生き生きと過ごすことができるよう、社会のシステムを提案することも目指しています。

スポーツ科学は社会の高齢化問題の解決に役立つ

東京大学とスポーツの関わり合いは、決して今に始まったことではありません。前回1964年の東京オリンピック・パラリンピックでも、東京大学は大きな貢献をしています。オリンピックから遡ること12年の1952年、安井誠一郎都知事は、関東大震災や東京大空襲からの復興をアピールしたいと思い、東京オリンピック・パラリンピックの誘致に名乗りを上げました。安井知事は第一高等学校から東京帝大法科に進まれ、学生時代はボートと柔道に明け暮れる日々を過ごされました。安井先生を引き継ぎ都知事となったのは、東龍太郎先生でした。東先生も第一高等学校から東京帝大医科に進まれ、高校・大学とボートで活躍され、高校時代のレースでは安井知事とも顔を合わせています。生理学と薬理学を専門とし、筋線維の収縮を研究テーマとして教授を務めています。助教授時代に「スポーツと健康の関係を解明し、スポーツによって生じる病気の予防法と治療法を見つけよう」とスポーツ医事研究会の設立に発起人の一人として尽力されました。先生は、IOC（国際オリンピック委員会）の委員でもあったためオリンピック・パラリンピック招致の成功を期待され1959年に都知事に就任されました。知事就任の1か月後にオリンピック招致が決まり、翌年、日本体育協会の中にスポーツ科学研究委員会が設置されました。この委員会では30の研究プロジェクトを設け、20の施設に研究者をトレーニングドクターとして配置し、さらに医師が選手の合宿を巡回するなどし、スポーツ科学研究と選手強化サポートの両面から活動が行われました。この活動には東京大学からも多数の研究者が参加しました。これによって日本におけるスポーツ及びスポーツ医学は大きく発展し現在の基礎が作られたのです。53年前の東京オリンピックの実施に際しては、選手達のトレーニング拠点として検見川総合運動場、陸上競技の練習会場として駒場キャンパスのグラウンドやラグビー場を東京大学が提供したことを、憶えているひとはもう少なくなったかもしれません。駒場キャンパスで名物の野球場のしだれ桜の木は、実はオリンピック後に東京都から贈呈されたものなのです。

さて、今なぜ、東京大学がスポーツ科学の研究を推進するのでしょうか？　私はこれには二つの意味があると考えています。

まず第一に、日本が抱える社会の高齢化の問題です。日本の高齢者、すなわち65歳以上の人口は昨年9月時点で25.9%です。2007（平成19）年に21%を超えて超高齢社会を迎えましたが、その後もこの比率は増加を続けています。健康であるまま生涯を終えることができればよいのですが、実際には一生の最後を、介護を受けながら生活している高齢者が多くいます。支援や介護を受けずに日常生活を送ることのできる期間を健康寿命と呼びますが、2010（平成22）年のデータでは、男性70.4歳、女性73.6歳です。これを平均寿命と比べると男性で約9年、女性で約14年も短いのです。つまり日本人は平均値でみても十年から十数年にわたり、不自由な身体をかかえ介助を受けながら生活しているということになります。誰もが、自立して生活しながら生涯を終えたいと願うのですが、そのためには、心身ともに健康であり続ける必要があり、これには若い時からスポーツを通じて心身を健やかに保つ習慣を身につけておくことが有益であることは十分に想像できます。どのような運動やスポーツがどのような形で健康寿命の延伸に寄与できるのか科学的見地から研究することは、社会の超高齢化の課題解決に大きく貢献するものと考えています。

スポーツ科学は多様性に寛容な社会への貢献にもつながる

もう一つの意味は、多様性に寛容な社会への貢献です。競技スポーツでは競争に勝つことが重要な目標ですが、一方でフェアプレーの精神が求められます。フェアプレーには、ルールを守って競技を行うということだけではなく、敗者や弱者への配慮も含まれます。例えば競技としての徒競走では結果としての順位が重視されますが、世の中には運動が苦手な子もいれば、身体が弱い子もいます。勝者のみを賛美し、勝者が敗者を思いやることのない社会は、豊かな社会とは言えません。性別、国籍、人種、宗教、健康状態などが異なる様々な人々がその違いを認め尊重する中で皆が生き生きと暮らせる社会を創らねばなりません。

先日全豪オープンを制したテニスのロジャー・フェデラー選手は数年前には圧倒的な強さを誇っており、男子シングルス1位にランクされていました。その当時、ある日本人記者がフェデラー選手にこうたずねました。

「なぜ日本のテニス界には世界的な選手が出てこないのか」

その時、フェデラー選手は「何を言っているんだ君は？ 日本には国枝慎吾がいるじゃないか！」と答えたと言われています。

国枝慎吾選手は車いすテニスのプロ選手で、グランドスラム大会で、男子世界歴代最多となる計40回優勝の記録を持っています。錦織圭選手が世界的に活躍する前の事ですが、当時、その日本人記者には障がい者スポーツ

としてのテニスは認識されていなかったのです。それに対し、スイスのフェデラー選手にとっては健常者スポーツと障がい者スポーツの間の壁がなかったのです。

パラリンピックは障がい者スポーツの祭典ですが、日本で障がい者がスポーツどころか社会に参加するようになるには、長い歴史を必要としました。東京帝大医科出身で、後に整形外科教授となる高木憲次先生は、1918（大正7）年から1920（大正9）年にかけて東京の下町で肢体不自由者の実態調査を行い、「肢体不自由者は家の中に隠されている」という実態を知りました。彼は障がいを持った子どもたちにも自立した生活を送る人生を提供しなければならないとの思いを持ち、そのためには、医療だけでなく自立した生活を送るための教育も必要と考え、1942（昭和17）年に整肢療護園という施設を東京の板橋区に設立します。1963（昭和38）年には高木先生の尽力により、肢体不自由児施設の全県配置、すなわち各都道府県に最低一つの肢体不自由児施設の設置が実現しました。

この翌年の1964（昭和39）年11月に、パラリンピックが、東京で世界から約400名の選手が参加し開催されたのです。日本からは53名の選手が参加しました。日本人選手の多くは、国立別府病院や箱根療養所に入院している人たちから選抜されたのでした。職業を持っている選手はわずか5名にすぎませんでした。つまりこの時代の日本では、障がい者はスポーツをすることはおろか、人前に出る機会も少なく、自立した普通の生活とは程遠い状況だったのです。パラリンピック閉会式の後、欧米から参加した選手の中には、銀座に繰り出したり、商談に向かう人もあったようです。それを見た日本の人々はとても驚くとともに、障がい者が社会に参加することの重要性を強く認識したのです。

このような高木憲次先生の活動や、東京パラリンピックの経験から、障がい者の社会参加、特に生活の自立や就労に向けた取り組みが各地で行われるようになりました。昨年4月には障害者差別解消法が施行され、障害のある人もない人も、互いにその人らしさを認めながら、共に生きる社会を作ることを目指すことが法律で定められました。いわゆる障がい者だけでなく、先に述べたように、超高齢社会を迎える日本では、高齢者の多くが何らかの不自由を感じながら生きています。若い健常者のみが社会で活躍できるという状況では、日本は豊かな国として生き延びることができません。東京大学を卒業する皆さんには、あらゆる不自由を含めて人間の多様性を尊重し、豊かな社会を作るために積極的に関わってほしいと思います。

卒業生の皆さんと東京大学とのつながりは永遠です

ここで、この「多様性」を支える重要な要素としての「自由」について触れておきたいと思います。自由な発想は学問の発展の原動力です。社会の中で他者と交わりながら生きていくためには、互いに自由であることが大切であり、そこで皆が自由を享受するためには、互いの個性の多様性を認めること、すなわち「多様性を尊重する精神」が必要なのです。自分と異なる個性を尊重する広い視野を持ち、自らと異なるものを理解し尊重し、他者と協調、共鳴する行動に繋げ、自由に学び自由に生活を送ることのできる社会を築いていきましょう。

皆さんは東京大学で自由に学んできたと思います。東京大学で学問の自由が実現しているのは、自由を尊ぶ伝統と自由に対する情熱とを持って受け継がれてきた先達の努力があったからなのです。皆さんには是非このことを心に留めていただき、皆さんの後輩たちがやはり自由を享受しながら学問や研究に没頭できるように、様々な場面でサポートしてください。皆さんの知恵、これから社会で得る知見は、これからの東京大学をよりよくするための大切な資源です。

「卒業」は終わりを意味するものではありません。皆さんと東京大学とのつながりは永遠です。よりよい教育と研究の環境を備えるために、卒業生だからこそできること、卒業生にしかできないことを是非していただきたいと思います。

最後に、スポーツ先端科学研究拠点の活動の中から一つエピソードを紹介します。昨年12月に公益財団法人日本サッカー協会との連携協定記念式典をこの安田講堂で行いました。ちょうど、FIFAクラブワールドカップ開催中ということで、来日していたFIFAのインファンティーノ会長ほかの方々も式典にいらしてくださいました。そこで、国際サッカー連盟事務総長代理のズボニミール・ボバン氏が講演されました。彼はクロアチア出身で、ユーゴスラビア代表、クロアチア代表、そしてイタリアACミランの選手としても活躍し、現役を引退した今もクロアチアの英雄です。

彼が選手として最も活躍した時代は、まさにユーゴスラビア紛争のまっただ中で、政治的に非常に不安定な時代でした。この中で彼は競技のフィールドに立ち、感性を持つ人間というものの大きな可能性と心身の健康が社会を支えるというスポーツの力を信じ、サッカーを続けたのです。今ではかつての敵とより近づき、互いを尊重することができるようになり幸せであると述べていたことが大変印象に残っています。人間は知性に裏付けられた感性という素晴らしい能力を備えた存在なのです。

卒業生の皆さんには、健全な肉体と精神を保ち、人間が持つ感性のすばらしさをいつまでも持ちながら、多様な人が参加する社会という豊かなフィールドで存分に活躍されることを期待しています。東京大学は皆さんが必要な時にいつでも戻ってこられる場となるように努力いたします。

本日は誠におめでとうございます。

答辞

（第一部）

農学部
中嶋樹理さん

本日、先生方ならびにご来賓の方々はじめ多くの皆様のご臨席を賜り、このように素晴らしい式典を挙行していただきましたことに、卒業生一同、深く感謝いたします。また、ただいま五神総長よりご告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げます。

私たちは、今日この日まで東京大学で多くのことを学び、卒業研究やゼミナールを通じて、新しい知を創造する過程に携わってきました。

かつて私は、研究というものは、普遍的な原理や法則、誰の目にも明らかな真実を見出していく行為であり、例えて言えば土の中から石を掘り出すような、ご

く単純なものだと考えていました。しかし、この認識は不十分なものでした。研究においては、石、すなわち何かしらの原理や法則を見出すことのみならず、その石を見る角度、立場を決め、適切な解釈を付与することも重要なステップの一つであると、自ら研究を行う中で気付かされました。

これから社会あるいは大学院へと進む私たちは、人類社会の課題に対して、より深く貢献することが求められるでしょう。そのとき、私たちの知に対する取り組みは、より複雑なものとなります。すなわち、先に述べた石を掘り出すこと、解釈することだけでなく、それをどのように役立てるのか社会に提示し、実践する、あるいはされることも肝要となります。その過程においては、世間の理解あるいは共感を得ることが不可欠です。しかし、それにとらわれて、逸脱した解釈を作り出すことなどがあってはなりません。これは知の作り手のみならず、受け手としての立場にも言えることです。

ポスト真実の趨勢に呑まれることなく、知に対して真摯に向き合い、未知なる課題に挑み続けること。それは艱難の絶えぬ行程かもしれませんが、それでもなお私たちが臨む理由あるいは動機の一つとなる言葉があります。

“Where there's a will, there's a way.”

「意思あるところに道は開ける」

私たちは東京大学の卒業生として、それぞれの志を胸に、未来を切り拓いていきます。

最後に、これまでご指導くださった諸先生方、大学生活を支えてくださった方々に心より感謝申し上げるとともに、皆様のご清栄と東京大学のさらなるご発展をお祈り申し上げ、答辞といたします。

答辞
（第二部）

教育学部
神田淳希さん

本日は私達卒業生のため、このように盛大な式典を催していただき誠にありがとうございます。五神総長をはじめ臨席いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。

卒業という事実と対峙し過ぎ去った日々に思いを巡らせると、大学生活で得たものの大きさに気付かされます。それは学問の奥深さであり、尊敬できる師との出会いであり、志を同じくする友と語り明かした夜であり、己とは何かを探し続けた戻りえぬ時間です。これらは全て答えのない問いの知覚と自分なりの解の追求の過程と言えるかもしれません。私は哲学から生理学まで幅広い学問領域を誇る教育学部に所属したことで、異なる関心と視点を持った学生達が専攻の垣根を越えて刺激を与え合い、他者の価値観を柔軟に吸収することによって自己を研鑽していくのを目の当たりにしました。また課外活動において、アメリカンフットボール部の主将として150人の仲間とともに勝利を目指した経験を経て、多様性を内包する集団が目的を達するためには、思いやりと想像力を持って対話を重ね、積極的に協調せねばならないという学びを得ることができました。こうした各人特有の経験が個々の個性を形作り、そしてそれら個性が出会い刺激し高め合うことでさらに個人を深化させていくという有機的な連鎖を生み出す。これを成長と呼ぶなら、東京大学という場で学ぶ幸運に恵まれた私達卒業生は、その機会を存分に享受することができました。

2017年現在、世界は大きな転換点を迎えました。ソーシャルメディアの発達や科学技術の進展が時間的空間的な人と人との距離を縮め、その近接の度合いは時として不適切と思われるまでになりました。氾濫する情報の濁流が正義を飲み込み、真実の在り処が不透明になってしまったことにより生じた予想だにし得なかった現実とそれに伴う数多の対立は、互いの存在を遮断し合い自身の内側に世界を構築することで、人類を他者に不寛容な社会へと歩ませようとしています。こうした状況において私たちに今求められているのは、議論によって相手を打ち負かすことでも、異なる価値観を排斥することでもなく、理性と知性を持って対話を重ね新たな可能性を模索することではないでしょうか。多様な意志・能力・姿勢を有する人々が適切に連帯し協調することでしか、未来に希望をもたらすことは出来ません。そして私達卒業生は、本学学生の使命である「世界的視野を持った市民的エリート」として、この実現に邁進していくことをここに誓います。

最後となりましたが、4年間私たちを支えてくださった皆さまに改めてお礼を申し上げるとともに、東京大学のますますの発展を祈念して答辞とさせていただきます。

平成28年度学位記授与式

平成28年度学位記授与式が、3月23日（木）に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部（文系研究科）と第二部（理系研究科）に分けて行われ、第一部は9時10分、第二部は11時25分に開式しました。音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「交響曲第29番 第1楽章」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記が授与され、修了生に告辞が述べられた後、修了生総代（第一部：人文社会系研究科博士課程 久保茉莉子（くぼまりこ）さん、第二部：工学系研究科博士課程 荒添弘樹（あらぞえひろき）さんから答辞が述べられ、式を終えました。

平成28年度学位記授与式 総長告辞

東京大学総長
五神 真

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられた皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。本年度は、修士課程2,982名、博士課程1,094名、専門職学位課程322名、合計で4,398名の方々が学位を取得されました。留学生はこのうち765名です。これまで長きにわたり、学業に打ち込む皆さんを物心ともに支え、この晴れの日をともに迎えておられるご家族、ご友人の方々にも、お祝いとともに、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

皆さんは、本日、どのような思いで学位記を手にされているのでしょうか。今、皆さんを取り巻く環境は大きく加速しながら変化しています。研究についても、世界を舞台にした競争は激しさを増しています。その中で、自ら追求すべき課題を探し、学位論文の研究テーマを定め、その答えに近づくために、時に寝食を忘れて取り組まれたと思います。

新しい発見に心躍らせるようなこともあった一方、思うように研究が進まず、苦しみ、自身のテーマに疑念を抱くようなことがあったかも知れません。その苦闘の中で、多様な研究仲間や教員との関わりを重ね、知の創造の場としての東京大学というものを実感された方も多いのではないでしょうか。

皆さんの論文や研究は、人類の知の共有資産に新たなピースとして蓄積され、140年の歴史を持つ東京大学に、新たな伝統を付け加えることでしょう。その研究が、たとえすぐに日の目を見るようなことがなかったとしても、いつか自身の手で、あるいは別の研究者の手によって、さらなる発展を遂げ得る可能性を秘めているということを忘れないでいてください。

昨年も一昨年に引き続き、東京大学で行われた研究がノーベル賞を受賞するという嬉しいニュースがありました。大隅良典東京工業大学栄誉教授です。東京大学でも本年2月に特別栄誉教授の称号を授与させていただきました。大隅先生は、教養学部基礎科学科、大学院理学系研究科で学ばれ、ロックフェラー大学の研究員を経て、理学部植物学教室で助手、講師をお務めになりました。その後、ご出身の基礎科学科で助教授に就任されました。受賞理由の「酵母のオートファジーの発見」は、大隅先生が駒場の基礎科学科で独立した研究室を主宰し、始められた研究を端緒とするものです。細胞が自分自身を分解する現象の科学としての面白さに惹かれ、夢中になって顕微鏡に向かわれたことがノーベル賞につながりました。大隅先生はその後、岡崎の基礎生物学研究所で動物細胞にも研究対象を拡大されました。そしてオートファジーは、酵母からヒトに至るまで生物にとって普遍的に重要で、生命維持に不可欠なシステムであるということが明らかになりました。今では、病気の治療など医学への応用も期待されています。

大隅先生はまさに知をもって人類社会に貢献し行動されている私たちの先輩です。そのような人材を私は「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。私は総長に就任して以来、毎年入学式で新入生に「知のプロフェッショナル」となるために、東京大学で鍛えてほしい3つの基礎力について説明してきました。3つの基礎力とは、「自ら新しい発想を出す力」、「忍耐強く考え続ける力」、そして「自ら原理に立ち戻って考える力」です。皆さんは学位を取得されたこれからも、この3つの力をベースとして、さまざまな人々を巻き込んで行動し、社会に貢献してほしいのです。そのためにも、価値創造の基盤となる「多様性を尊重する精神」と、自分の立ち位置を見据える「自らを相対化できる広い視野」を保ち続けることが欠かせません。

思考や感性を縛る文化の特質そのものを意識し省みるべき

東京大学大学院での学びを通じて、皆さんは、この「知のプロフェッショナル」としての基本的な資質を備えられました。その資格を東京大学の名において得たということを、ぜひ、皆さんの生涯にわたる誇りの源泉として、心に留め置いていただきたいと思います。そして実際に行動してほしいのです。資格を得たということは、同時に責任を負ったということでもあります。「知のプロフェッショナル」が忘れてならないのは、知性に支えられた情熱であり、真理に対する謙虚さと誠実さです。学位に相応しい矜持を持つと同時に、謙虚で誠実であり続けることを忘れずに、その資質を一層高めていってください。

東京大学は創立以来140年間、東洋と西洋の異なる学知を融合し新たな学問を創りだすことを伝統としてきました。今、グローバル化が加速する中で、大学という場は、人類全体の知の多様性という観点から、とりわけ重要な役割を担っていると言えます。しかし、私たち自身の日常には、自らが何者なのかということを深く問う機会はあまりありません。人類社会全体にとってより強靱な知の体系を構築するために、私たち自身の思考や感性を縛っている文化そのものの特質を意識し、省みる必要があると思います。

本日は、そのヒントとして、かつて東洋文化研究所の所長をされた中根千枝先生が、今からちょうど50年前の1967年にお書きになった『タテ社会の人間関係』についてふれたいと思います。

中根先生は、女性として初めて東京大学教授となって東洋文化研究所長を務められ、さらに女性初の日本学士院会員になられるなど、日本の学術界における女性研究者のパイオニアの一人で、文化勲章も受章されています。文学部の東洋史学科で中国とチベットの社会を学び、東洋文化研究所の助手時代に3年間、インドのアッサム地方でフィールドワークをされ、現地を歩き回り、そこの家族や人間関係を観察する中で、後の卓抜な理論的パースペクティブにつながる、豊かな発想の基盤を

築かれました。

代表作である『タテ社会の人間関係』は、出版されてまもなく我が国でベストセラーになりましたが、日本にとどまらず世界各地で翻訳され、海外でも広く読まれました。日本社会や日本人がどのような特質を有するのかを世界に伝えるうえで多大な影響を与えた一冊でした。その内容は、インドおよび欧米などを比較の対象としながら、日本の社会構造の特質を描きだし、「タテ社会」という新しい概念をあざやかに提起したものです。

日本の個性を基盤に新たな公共性の理念をつくる時期

日本社会での人物の評価は、個々人の属性すなわち「能力」や「資格」によってではなく、個々人が属する集団すなわち「場」によって規定される。つまり日本の社会は、個々の資格や能力などよりは、年齢、入社年次などの組織としての序列が支配する「タテ社会」であると中根先生は説明しました。そして、それ故にもたらされる日本人の行動様式および日本社会の長所と短所を冷静に分析したのです。

日本の企業でかつて一般的であった終身雇用制にも「タテ社会」の原理があらわれています。時に親子の関係にもなぞらえられる、強い家族的一体感や団結に支えられた会社や組合などの「タテ社会」型の組織は、欧米などの個と個の契約的な関係を基盤とする「ヨコ社会」とは原理的に異なります。その独特の文化のパターンが、様々な矛盾や弊害を抱えながらも、日本の戦後における驚異的な復興や経済発展などを効率的に達成せしめたのだと論じられました。そうした意味で、中根先生による日本の文化の分析は、人間社会の発展へと至る道筋が、西欧型の産業化によってのみ拓かれるわけではなく、本来、もっと多元的で複線的なものである可能性を示していると考えることができます。すなわち、この論考は、日本という東洋の一つの国の社会についての分析から発しつつ、国境を越えて広く、人間の社会そのものの普遍的な性質について、新たな考察の視点をもたらしたのです。そして、だからこそ、この論説が海外にも大きなインパクトを及ぼし得たといえるのです。

自分をとりまく文化を反省的にとらえようとする試みは、中根先生の研究だけではありません。『タテ社会の人間関係』出版の数年後（1971年）には、当時、本学の医学部精神科教授であった土居健郎先生によって『甘えの構造』が出版されています。それは、日本人に特徴的な精神構造を、「甘え」という正確には英語に翻訳しにくい固有の感情の中に見出そうとするものでした。その約10年後（1979年）には当時、教養学部におられた村上泰亮、公文俊平、佐藤誠三郎という専門分野を異にする3人の教授によって『文明としてのイエ社会』が出版されることになります。これもある意味では「タテ社会」論で指摘された日本の社会構造の歴史的成り立ちを、中世に台頭してくる武士階級の「イエ」の原理から精緻に辿ることで、学際的に発展させようとする試みだったのです。注目すべきことは、さらに日本社会の未来の姿について、2つのシナリオを示していることです。西欧型の価値に近づき、他の国々と等質化していく「溶融的国際化」と、日本が独自の価値を保持したまま、他の国々と互いに違いを認め合い共存していく「適応的棲み分け」です。これは、出版以来40年近くを経て、グローバル化が加速する今日の我々が直面する選択でもあります。

世界は、今、先の見えない大きな変化のうねりの中にあります。国際紛争、宗教対立、地域間格差などの問題は複雑化し深刻さを増すばかりです。これまで人類が長年かけて創り上げ、世界を支えてきた民主主義や資本主義といった仕組みも、その原理だけでは、山積する多様で複雑な課題に対処できないのではないかとさえ思えます。こうした中で、ただひたすら、西欧の先進工業国が理想としてかかげた社会構造や価値に近づき、他の社会と同一化し均質化していくという道筋は正しいものなのでしょうか？　それとも、もういちど自分たちの身にしみついた文化や行動様式を批判的に反省しつつ、その個性を基盤にしながら、新たな公共性の理念をつくりあげていくべきなのか。今一度、立ち止まってじっくりと考えるべき時期が来ているのです。

中根先生たちの論考は、そのためのヒントとなり、あるいはたたき台となって、皆さんの思考や洞察を広く深く展開させてくれるはずです。

ここでもうひとつ、皆さんに注目しておいてもらいたいことがあります。それは、知的な共感を呼び起こす言葉の力です。ここで紹介した東大の教員たちによって著された日本人論・日本社会論は、「タテ」「ヨコ」あるいは「甘え」「イエ」といった、人々がよく使う日常語をあえて持ちだして、対象の本質を鋭くえぐり出そうとしています。もちろん、中根先生たちがこうした普通の言葉を使うのは、反射的な思いつきによるものではなく、熟慮を重ねたうえで選ばれたものでしょう。文科系の学問には、研究成果を言葉で普遍化し、言葉で発信するという作業が必ず伴います。理科系の学問領域では、その言葉の代わりを数式が果たす場合もあるでしょう。いずれにせよ、この先達たちの論考は、感覚的にも理解できる日常的な言葉の力を借りながら、その意味するところを深くまで探り、普段は意識されないような構造の普遍性を浮かびあがらせているということができます。だからこそ、人々の間に、知的な共感を呼び起こし、一時的なブームでは終わらない、これから先も長く読み継がれていくべき、まさに古典と呼ぶにふさわしい研究成果となったのです。

「知に支えられた真の共感」を努力して作り上げよう

いまこの世界において、情報化の進行は凄まじいものがあります。グローバル化の加速と相俟って、私たちは氾濫する情報の洪水に飲み込まれ、みずからの立ち位置を見失いがちになっています。特に、ネット上では、反射的で一方的な情報の拡散によって、衝動的で感情的な大きなうねりが生じ、それが一過性の偽りの共感を呼んでしまうことがしばしば起きています。しかし、それは、選び抜かれ磨きあげられた言葉が呼び起こす真の共感とは、まるで性質の異なるものです。こうした時代だからこそ、皆さんには、時流に流されず、普遍性を備えた確かな知、そして、その知に裏打ちされた言葉をしかと見極め、他者と分かち合っていただきたいと思います。そして、皆さん自身で、そうした知を生みだし、言葉を創造し発信していただきたいのです。知性を軽視し、言葉を放棄してはなりません。他者を尊重し、誠実な対話を通じて、

「知に支えられた真の共感」を作り上げていく努力を惜しむべきではないのです。

こうした姿勢は、時に世の中の流れに抗い、皆さんに孤独を強いることになるかも知れません。しかし、本来、「知のプロフェッショナル」とは、自身の信念に従って、こうした姿勢をしっかり貫ける人のことを指していうのだと思います。そして、皆さんの隣には、東京大学で共に学んだ同じく「知のプロフェッショナル」としての仲間がいます。お互いの力を活用し合い一つに併せれば、地球と人類社会の未来に向けて、新しい価値と変革の道筋を必ずや生みだしていけることでしょう。

皆さんが学んだ東京大学は1877年に創立され、本年4月に140年を迎えます。終戦を境に、ちょうど前半、後半ほぼ70年ずつの歩みを続けてきました。戦前の70年は日本社会の近代化において、戦後の70年は復興と成長において、東西両洋の学術を基礎としながら、独自の学問を生み育てることで貢献をしてきました。そして、今、東京大学は、次なる70年の第3ステージに向けて、大きく飛躍しようとしています。皆さんは、まさにその歴史的な移行期に立ち会っているのだと言えます。本日を門出の日として、東京大学から離れる方も多いでしょう。しかし、皆さんと東京大学のつながりは、ここで終わりではありません。

私は、今日を、皆さんと東京大学との新しいパートナーシップの出発点にしたいと考えています。新たなステージに踏み出すにあたり、東京大学は、「産学協創」と名付けた活動を始動させています。これまでの産学連携は、いわば、予め決められた問いに対して、その解き方を共同で考えるという限定的なものでした。それに対して「産学協創」は、解き方の模索だけでなく、発生する時代の課題と向き合いながら、何を解くべきかという問いそのものからともに考え、そして協力して行動するものです。こうした形で大学と企業とが手を組むことで、新たな知を創りだすことはもとより、その知を確実に社会に拡げ浸透させていくことが可能になるはずです。

本日、学位記を手にされた皆さんは、これからそれぞれ違った進路を歩まれることになります。大きな課題を解決するために基礎に立ち戻る必要がある時、あるいは本学で共に学び、研究をした仲間達と再び協力をし合いたいと思った時などには、是非新たな産学協創の輪にも加わっていただきたいと思います。東京大学は、いつでも、皆さんを歓迎します。

最後になりますが、皆さんが、今後益々、それぞれの研究や職務に邁進されること、そして、皆さんの未来に幸多きことを心より祈念し、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

学位の取得、誠におめでとうございます。

答辞
（第一部）

人文社会系研究科
久保茉莉子さん

本日は、私たち修了生のためにこのような盛大な式典をご用意くださり、誠にありがとうございます。ご多忙にもかかわらずご出席くださった皆様に、修了生一同心より御礼申し上げます。また、只今五神総長から激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて感謝申し上げます。

私は、東京大学という恵まれた環境のなかで、学部・大学院あわせて12年間の時を過ごしました。東京大学は、各分野の最前線で活躍されている先生方がそろい、知的好奇心の塊のような学生が集う学び舎であると同時に、文献や史料の宝庫であり、国内外の研究者による学術交流が日々活発に行われている場です。そうした環境で勉学を続けることができたのは、本当に幸せなことでした。今日、こうして修了式をむかえるにあたり、この大学で学んだ日々を振り返ると、感慨深いものがあります。

私は、学部時代は文学部で東洋史を専攻し、大学院人文社会系研究科に進学後は、中国近現代史・法制史を重点的に勉強してきました。様々な時代・地域の歴史を勉強する過程で、現代社会が抱える問題の本質を探っていくことの重要性を認識し、先行研究や史料との向き合い方や、論文を書くことの意義など、学問を続けていくうえでの基本的な姿勢・作法も学びました。また、積極的に外に出て学ぶことが推奨されるアジア史専門分野に所属したことで、分野・大学・地域間の境界線を越え、たくさんの方々に出会い、刺激を受け、視野を広げることができました。特に、2012年から2013年にかけて上海の復旦大学に留学した経験は、私にとって一生の宝物です。ちょうど中国の反日運動が激化した時期でしたが、私が接した方々は、みな本当に温かく、国際関係を構築する根本にあるのは人と人とのつながりであるということを実感しました。

明日から、私たちはそれぞれ新たな道を歩んでいくこととなります。即効性や実用性が優先され、学問全体が軽視される風潮が強まっている時代を生きるのは、決して楽なことではないでしょう。それでも、東京大学で学んだ経験を糧として、新たな知見を社会に提示することを目指し、前に進んでいきたいと思います。

最後になりますが、五神総長をはじめ、いつも適切な助言を与えて下さった諸先生方、また様々な場面で私たちを支えて下さった職員の皆様に、改めて御礼申し上げます。そして、東京大学の一層の発展を願い、答辞とさせていただきます。

答辞
（第二部）

工学系研究科
荒添弘樹さん

本日は、五神真総長を始めとする諸先生方、並びにご来賓の皆様のご臨席を賜り、このような盛大な式典を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして心より厚く御礼申し上げます。また、只今五神総長からの激励のお言葉を戴きましたこと、重ねて感謝申し上げます。東京大学大学院の門をくぐってから今日に至るまで、ただひたすら研究に邁進し、こうして卒業という念願の日を迎えることができました。

私は化学を専攻とし、先人たちが築き上げてきた尊い知を学んでいく中で、化学の奥深さを肌で感じ、化学の持つ無限の可能性に魅了されました。その化学の自由さに憧れ、研究活動では自身の知的好奇心に従い、主体的に行いたいという思いに駆られました。この思いを胸に、研究のテーマを自ら提案するべく、研究の傍らに異分野の基礎知識を学ぶことから始め、最新の論文を読み漁りました。もちろん、そうして提案したものがそのまま全て承認された訳ではなく、多くの壁が立ちはだかり、苦労と挫折の連続でした。精神的に辛く投げ出したくなることもありました。時には無理をしすぎて体調を崩してしまうこともありました。それでもただただ真摯に研究と向き合い、未だ見ぬ知を追い求め尽力してまいりました。そして大変幸いなことに、その自ら進めてきた研究において1800年代の発見以来粉末でしか得られなかった材料の薄膜を得ることに成功し、粉末ではわからなかった様々な特性を発見することができました。薄膜ができた時の感動を私は生涯忘れることはないでしょう。もちろんこの発見が直ちに社会に貢献できるわけではありません。しかし「知」は風化することなく後世へと紡いでいける唯一無二のものです。その「知」の紡ぎ手としてわずかでもその一端を担えたことは、この世界に新たな財産を残せたことは何事にも代えがたい喜びです。このような貴重な経験ができたことは、本学の先生方が私たちの自由な研究活動を最大限に尊重し、厳しくも温かくご指南下さったからこそです。またこの経験を通じて、物事を達成することに必要なことは、好奇心を持って努力を積み重ねていくことだと感じております。答えが準備されていない研究活動において、主体的に成し遂げたという実績が私たち修了生の大きな自信となり、この先予期せぬ問題が待ち構えていても解決へと導いてくれる力になると信じております。

本日をもって、私たち修了生はそれぞれの目標へ向かって別々の道を歩むこととなります。それぞれ歩む道は異なれども、東京大学で学んできたことを胸に抱き、驕らず慢心せず、不断の努力を持って日本、延いては世界の発展に貢献できる人材になれるよう精進いたします。

最後になりましたが、今日まで私たちをご指導ご鞭撻下さりました五神総長を始めとする諸先生方、職員の皆様、互いに切磋琢磨してきたかけがえのない友人や先輩・後輩のみなさん、そしていつでも私たちを見守り支えてくださったご家族の皆様に、修了生一同、心より御礼申し上げます。皆様の益々のご清栄と、東京大学のより一層の発展を心から祈念致しまして、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

平成29年度入学式・大学院入学式

平成29年度学部入学式と大学院入学式が、4月12日（水）に日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約3,000名の新入生と、そのご家族など約5,900名、合わせて約8,900名が出席しました。午前9時45分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の大隅良典本学特別栄誉教授・東京工業大学栄誉教授、大塚陸毅東京大学校友会会長が登壇し、10時40分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて石田淳教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の大隅良典先生から祝辞をいただきました。その後、入学生総代田口翔一さん（理科II類）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時45分に式を終えました。

午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生と、そのご家族など約3,200名、合わせて約6,000名が出席しました。13時25分から運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の石井菜穂子地球環境ファシリティ議長兼CEOが登壇し、14時20分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、宮園浩平 医学系研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の石井菜穂子さんから祝辞をいただきました。その後、入学生総代織田耕彦さん（新領域創成科学研究科）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時35分に式を終えました。

平成 29 年度入学式 総長式辞

東京大学総長

五神 真

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。ご列席のご家族の皆様方にも、心からお慶び申し上げます。本日、入学された皆さんは3,120名です。

皆さんが入学された東京大学は、明治10年、1877年に創設されました。その源流は江戸時代にさかのぼります。本日4月12日に140周年を迎えました。第二次世界大戦の終戦をはさんで前後ほぼ70年ですが、皆さんは、東京大学の第三の70年に向け、その栄えある第一期生となったのです。

東京大学のはじめの70年は、明治の新たな開国の時代に、国際社会で認められるため

に近代国家としての形を整え、それを担う人材を育成することが急務でした。そのために西洋の学問を旺盛に取り入れ、その中で東洋と西洋の異なる学問を融合し新たな学問を創り出すという東京大学の伝統が築かれました。しかしその後、日本は敗戦という大きな蹉跌を経験します。

第二の70年は、そこからの復興から始まりました。20世紀後半は科学技術の革新を牽引力とし、工業化が進み、世界経済は飛躍的に拡大しました。その中で日本は高度経済成長を達成し、世界有数の先進国としての地位と平和な社会を獲得しました。ここでも東京大学は、最先端の学術研究を学んだ人材を社会に送り出し、大きな役割を果たしてきました。

しかし、この70年がずっと穏やかだったというわけではありません。特に2011年3月の東日本大震災は忘れられません。昨年は、熊本県と大分県でも大きな地震が発生しました。先月11日に岩手県の大槌町で行われた津波被害の慰霊祭に私も出席致しました。現地では復興に向けた懸命な活動が今も続いています。6年を経てもまだ道のりは長く、知恵と忍耐がいっそう必要です。これらの災害で犠牲となった方々に改めて哀悼の意を捧げるとともに、東京大学が続けてきた復興支援の輪に、皆さんにも是非加わってもらいたいと思います。

さて皆さんが受験の準備で忙しかった昨年2016年は、世界の大きなうねりを感じる年でもありました。世界的な金融不安に始まり、世界各地での大規模テロ、イギリスの国民投票におけるEU離脱の決定、アメリカの大統領選挙とその波紋など、混迷は深まるばかりです。世界の調和的発展を脅かしかねない事態に対する不安と緊張がいっそう高まっています。人類が創り上げてきた、民主主義や資本主義といった社会・経済の基本的な仕組みそのものを、今後どのように調整していくべきかが問われています。

知に裏打ちされた言葉を自ら鍛えあげよう

私が何よりも心配なのは、これらの事象の背景で、人間の知性の力に絶望し、知を否定するような動きが目立ってきていることです。科学技術の革新は、SNSなど、旧来の新聞や電波による放送とは異なった、情報拡散の新たな手段を生みだしました。この新しい情報メディアは個々の人々の生活スタイルだけでなく、事実や真実をめぐる人々の感覚やその共有の仕方をも変貌させつつあります。事実にもとづく反論や丹念な論証よりも、感情に訴える一方的な断定が大きなうねりとなり、偽りの共感を生みだしてしまうのです。このような事態を指して、「ポストトゥルース」の時代の到来を論ずる人もいます。新聞や放送といった既存のメディアを担ってきたプロのジャーナリストすら、新たな情報環境の影響から逃れることは難しそうです。新しい情報通信の環境を私達が人類社会をより良くするためにポジティブに活用できるのか、それとも制御ができず自滅してしまうのか、その分水嶺に立たされているのです。

ここで皆さんにまずお伝えしたいことは、「言葉を大切にしよう」ということです。私たち人間は言葉によって世界を知り、言葉によって世界を新しいものへと変えていくのです。言葉は人間の「考える」という知的な探究の作業の支えです。そして、その成果を時を超えて伝え、他者と分かちあってきた媒体であり、新たな社会と未来を創る糧でもあります。だからこそ、情報の海に溺れて飲み込まれてしまうのではなく、知に裏打ちされた言葉を自ら鍛えあげ、新しい推進力や想像力を生み出していく必要があります。しかし今、普遍性を備えた確かな知に裏打ちされた言葉をしっかりと見極めることがおろそかにされてしまっています。他者の立場をよく理解しよく考えた上で心のこもった言葉を使うという行為が、ないがしろにされているように思われます。

今こそ、知のもつ力を強く信じ、他者を尊重し、丁寧に言葉を吟味し、冷静な対話を通じて、確かな共感、すなわち「知に支えられた真の共感」を作りあげ、広げていく努力を惜しんではならないのです。大学はその中心となるべきであり、皆さんは私達と共に、その活動を支える仲間になったのです。

今お話したような社会的な事象や我々の日常と比べて、「自然」というものの時間や空間のスケールの広がりは、桁違いです。しかし、たとえば地球についても、無限に大きく盤石で不変のものでないことを強く意識すべき状況にあるのです。環境破壊、地域間格差、宗教対立の深刻化など、人類全体の持続を脅かす課題は、ますます複雑さと深刻さを増しています。人口が増え、科学技術が人間の力を拡大するなかで、地球という空間が限界を有する環境であることを認識せざるを得なくなっています。

このように有限化した地球、すなわち「小さくなった地球」、において、個々の人々は自由で活発に活動しながらも全体として調和のとれた発展を実現するにはどうすべきなのでしょうか。その答えは決して、世界全体を一つの価値観で塗りつぶす均質化ではないはずです。個々の多様な文化や伝統を大切にしつつ、むしろその多様性こそが、全体を強靱にする原理として活用されるべきなのです。このような発展に向け、個人や組織がとるべき行動のガイドとして、国際連合は2015年に17の目標からなる「持続可能な開発目標＝SDGs、sustainable development goals」を定めました。これは、世界の公共性に奉仕するという東京大学の精神に合致しています。そこで、この目標を活用し、行動に繋げたいと考えています。

多摩川の回復のような経験を普遍化し伝える責務がある

ここで、地球という環境の有限性に関連して、皆さんにも身近な「水」について、お話ししたいと思います。水は人間を含め、あらゆる生命を育み支える、かけがえないものです。一方で水害や津波などの災害をもたらす脅威ともなります。水をいかに制御し利用す

るかは、社会や経済の発展にとって不可欠なのです。

私は子供の頃、多摩川のすぐ近くで育ち、水遊びや釣りをおおいに楽しみました。しかし、当時、既に生活排水などで川の汚染がすすんでおり、「どぶ」のような匂いや洗剤の泡が舞っていたことを思い出します。その後、河原を歩くこともなくなり、すっかり遠ざかっていたのですが、最近ある雑誌の表紙に、鮎が川面から飛び跳ねている写真があり、それが多摩川だと知って大変驚きました。その雑誌には、近隣の小学生達が川に入って行う体験学習についても紹介されていました。子供達が川で泳げるほど水質が劇的に改善していたのです。そこで、少し多摩川について調べてみることにしました。すると、そこには「水」を意味づけ利用する人間社会の様々な物語があったのです。

かつての多摩川の清らかな流れは、万葉集の東歌（あずまうた）にも詠まれています。近世になって、農業用に本流からも支流からもおびただしい数の用水路が引かれ、水を産業の資源として利用するためのインフラの整備が進みました。17世紀の中ごろには玉川上水が開通し、江戸の中心部の飲み水も支えることになります。資源としての水は「用水」あるいは「上水」と呼ばれて利用されていきます。皆さんが学ぶ駒場キャンパスは、明治時代には農学校があり、その水田にも上水が引かれていました。余談ですが、忠犬ハチ公の飼い主としても有名な上野英三郎先生は、当時、農科大学の教授で、この用水の農業利用について研究をされていたのです。

高度経済成長期になると、多摩川には、開発された周辺部の宅地などから汚水が流れ込むこととなります。経済成長の中で利用する資源としての水だけに目が向き、利用した後の「下水」の後始末には思いが至らず、水質は極端に悪化していったのです。私が中学生だった1970年代には、それが社会問題となり、地域の人々が水質改善のために立ち上がりました。そこで下水・排水に対する取り組みが始まり、上水と下水、用水と排水とに切り離されてしまっていた水が、またひとつながりの存在として認識されるようになりました。そしてその結果、魚が戻り、子供達が親しめる場として多摩川は見事に甦ったのです。

現在、社会はかつてないスピードで発展していますが、地球上の資源は有限であり、野放図で無自覚な開発は永続しません。多摩川の例では、幸い回復させることができましたが、元に戻せない不可逆なダメージを地球に与えてしまうこともあります。そのようなことを防ぐために、意思決定をどのように行っていくのか、次世代の社会システムをどう作っていくのか。多摩川の例をみても、日本には語り継ぐべき経験が数多くあります。それを学問として普遍化し、世界にしっかり伝えていくことは、私達の重要な責務です。

東京大学が掲げる教育理念は「世界的視野をもった市民的エリート」の養成です。知をもって人類社会をより良くするために主体的に行動し、新たな価値創造と課題解決に挑む人材です。私は一昨年4月に総長に就任し、このような人材を「知のプロフェッショナル」と表現して説明しています。本日は、昨年、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典東京工業大学栄誉教授からご祝辞をいただきます。本年2月には東京大学でも特別栄誉教授の称号を授与させて頂きました。大隅先生は、まさに、知のプロフェッショナルのお手本と呼ぶべき先輩です。

「知のプロフェッショナル」となるための三つの基礎力を

さて、「知のプロフェッショナル」となるために、まず三つの基礎力を養ってほしいと思います。第一は「自ら原理に立ち戻って考える力」、第二は、あきらめず「忍耐強く考え続ける力」、そして第三に、「自ら新しい発想を生み出す力」です。これらをベースとして、社会に貢献するためには、様々な人々を巻き込んで実際に行動しなければなりません。そのためには、「多様性を尊重する精神」と、自分の立ち位置を見据える「自らを相対化できる広い視野」が必要です。そうした基礎力と精神と視野を身につけ、人々の間に「知に支えられた真の共感」を生みだす担い手となってほしいのです。

さて、これから始まる大学での生活において、これらの力を獲得するために、どんなことから始めたらよいでしょうか。皆さんにこれからの駒場の生活の中で実践してほしいことを、少し具体的に提案したいと思います。

私達は、大学での学びの準備として、知識の量ではなく、基本となる知識を柔軟な発想によって使いこなす力を、皆さんには鍛えておいてほしい、と考えています。入学試験ではそこを重視して出題しています。皆さんはその要求にしっかり応え、めでたく入学されたのです。

しかし、これはいわば準備体操です。これから始まる学びは、これまでの勉強とは異なります。あらかじめ答えが用意された問いに対して、その答えを言い当てるという受け身の学習だけでは足りません。もっと自由で主体的な学びに変わらなければなりません。まず早い段階で、この大学での勉強の流儀を身につけ、そしてそれを楽しんでほしいのです。

このような能動的な学びへのギアチェンジをサポートするための仕掛けも用意しています。その一つが、「初年次ゼミナール」という少人数の演習です。様々な分野の第一線で活躍する東京大学の先生方が、それぞれ工夫をこらし、大学で学ぶための基本姿勢を皆さんに直接伝えます。演習の課題には、クイズ番組のようなはっきりとした答えはないかもしれません。答えを導くために、根拠のある事実を積みあげ、厳密にまた論理的に思考を進める必要があります。どのような情報を調べるか、得た情報をどう解釈するのか、そしていくつもの情報をどのようにまとめ上げ、どう活かすのか。その取り組み方を学ぶなかで、第一の基礎力「自ら原理に立ち戻って考える力」と、第二の基礎力「忍耐強く考え続ける力」を鍛えるとはどういうことか実感し、身につけてください。

専門課程に進むにつれて、第三の基礎力「自ら新しい発想を生み出す力」を意識してもらいたいと思います。最後の卒業研究や卒業論文は、その力を鍛えるよい機会になるでしょう。学問において何より大事なのは、自ら問いを立て、そしてその問いを自分で解いていくことです。問いを立てるには新たな疑問が必要であり、解くためには事実に基づいて分析の論理を積み上げる姿勢が重要になってきます。

「まだ答えがない問い」を自ら作れるようになろう

最終的な私たちの願いは、そのような経験を積んだ上で、皆さんが「まだ答えがない問い」を自らが作れるようになってもらうことです。「まだ答えがない問い」とはもちろん、デタラメな問いという意味ではありません。「問い」を立てるということは、自分が何を知っているのかを自分で見つめなおす、極めて知的でタフな作業なのです。そこでは、大胆かつ謙虚という、相反するような気持ちを持つことが求められます。

なぜそのような問いを立てる力が大切か。それは大きく変わりつつある現代の世界で生き抜くためには、まさに簡単には答えを見つけられない、まだ答えが用意されていない問題に挑戦し続けなければならないからです。現代の社会には、手に負えない難題であっても放り出すわけにはいかないもの、解決まで粘り強く取り組まなければならないことが数多くあります。答えだとされているものをあえて疑い、事実の探り方を変え、確かめ方を模索しながら、何とか前に進んでいかねばなりません。「まだ答えのない問い」と向かい合うこと、それこそがまさに学問の営みであって、これもまた大学生として知ってもらいたいことなのです。大学という場はそうしたトレーニングをする最良の場所です。

このようにお話しすると道のりは遠そうですが、第一歩を踏み出しさえすれば、決して難しいことではありません。最後に、その第一歩となる秘訣をお教えしておきたいと思います。

それは、教室で発言することです。質問は大いに結構。先生方は、皆さんが口を開くのを待っています。はじめはうまく発言できず尻込みしてしまうかもしれません。しかし上手にできるまでは人前でやらないというならば、いつまでも上手にはなれません。

大学の教室は、知のコミュニケーションの場です。その場に参加する醍醐味を味わってください。多様性が許され、個性が歓迎されるということを知ってください。そこが高校までとは決定的に違うところかもしれません。自分と異なった意見を知って、ハッとする体験がとても重要です。いわゆる「空気」が変わるこうした瞬間を体験することを通じて、「多様性を尊重する精神」を育んでください。この多様性こそが新たな知を生みだす原動力、すなわち東京大学の卓越性を支えているのです。そして、この精神こそが、知に支えられた真の共感の基礎なのです。

大きな教室で発言することは、なかなか勇気のいることです。まずは少人数クラスで挑戦してみてください。少人数クラスとしては、初年次ゼミナール以外にも、理系学生にはALESS、文系学生にはALESAという英語学習の授業も用意されています。

他者を思いやり、互いを認め合いながらも、異なった意見が言えるためには、自由な場が必要です。東京大学は、キャンパスにおいて、少数派かもしれないと思う人々が堂々と発言し、行動できる、そのために必要な環境を進んで提供していきます。そしてすべての学生の皆さんが「東京大学で学んでよかった」と心から思ってもらえるように努力します。

皆さんが思う存分学ぶためには何よりも、皆さん自身の心身の健康が大切です。まず朝ご飯をしっかり食べ、一日の始まりの時間から有意義に使うようにして下さい。そして、自分に適した形で、運動する習慣を身につけるようにしましょう。体育実技の時間や、運動会・サークル活動も有効に活用してください。どうか皆さんの大学生活が実りの多い時間となるように、皆さんの健康と健闘を祈っています。

教養学部長式辞

東京大学教養学部長
石田 淳

これから始まる大学の時間はどのような選択の場面なのか

3,000人を超える新入生、そして約6,000人のご家族のみなさま、その思い出に深く刻まれるであろうこの時をここに共有できることを光栄に存じます。

そして本学への入学を許可された新入生のみなさんが、本当に東京大学で学んでよかったとの深い喜びを抱いて卒業の日を迎えられることを心から願い、そのために本学の一員として微力を尽くしたいと考えます。

入学にあたり、新入生のみなさんには期待もあれば不安もあるでしょう。現在の心境も、各人各様かもしれません。大学で過ごす毎日が始まるこの時期に、これからの時間はどのような選択の場面なのか、ということをいくつかの観点から考えてもらいたいと思います。

まず自分自身にとっての選択。みなさんは、駒場キャンパスの教養学部において前期課程を過ごすことになります。東京大学は、高校卒業・大学入学段階の限られた知識・情報や先入観を頼りに学生がその専門を選択するのは適切ではないと考え、前期課程教育を通じて十分に見識を広げ、断片的な知見を関連づ

け、的確な判断力を養ったうえで志望先を選択する体制を整えています。

後期課程のみならず、さらにその後の進路について、「自分の将来にはどのような選択肢があるのか」という問いに悩むことができるのは、数多くの選択肢と長い未来を持つみなさんの特権です。この特権を軽々に放棄する手はありません。たしかな情報と豊かな想像力をもって後悔のない選択をしてください。そのためには前期課程に在籍している間に意欲的に幅広く学ぶほかありません。学問を通じて人間が解こうと取り組んでいる問いは実にさまざまです。人間の知的活動の奥行きと広がりを、駒場キャンパスで実感してもらいたいと思います。

将来の選択について悩むことができるのは、みなさんの特権だと申し上げましたが、とは言え悩みは悩みです。それゆえそこに苦痛を感じる人もいるかもしれません。また学生生活を送るうえでの悩みは、将来の選択をめぐる不安に限られるものではないでしょう。みなさんを迎え入れる駒場キャンパスには、学生相談所、進学情報センターをはじめ各種の相談窓口がありますから、決して一人で思い悩まずに、みなさんの悩みに耳を傾けてくれる専門家たちを訪ねてください。

就活に専心するだけでは社会の期待を裏切ることに

本日は、新入生の二倍の数のご家族もお見えですが、これまでみなさんを支えてくださったご家族と、この日の喜びを共にできることは幸運なことです。実は喜びを共にできることは必ずしも当たり前のことではありません。人間はその喜びを大切な人たちと共有できるときに充実を感じ、何等かの事情でそれを共有できないときに欠損を感じる存在です。みなさんの誕生から今日までの数々の喜びに加えて、これからの長い人生においても、たくさんの喜びを大切な人たちと共有して行けることを願います。

次に大学にとっての選択。ここで1877年の創設以来の本学の歴史を振り返る余裕はありません。ただ、2004年の国立大学法人への移行後、本学は、時間の経過とともに変化する財政状況等の制約条件の下で、本学の目指すべき目標をみずから定義してきたことを強調したいと思います。目標の設定は大学にとっての重要な選択です。関連して新入生のみなさんの注意を喚起しておきたいのは、大学が生み出す学術的知見に対する社会からの期待なしには、大学における教育・研究は成り立たないということです。ですから、みなさんが、就職という形で労働市場に参入する際のご自分の価値を高めることだけに専心して大学生活を送っては、社会からの期待を裏切ることになろうかと思います。

大学は、研究活動を通じて、人間社会が直面するさまざまな困難を回避するあるいは解決する学術的知見を広く社会に還元し、さらに、その教育活動を通じて、研究活動の知的成果の意味を正確に理解できる人材を養成するという使命を帯びています。そのためにも、みなさんには社会が直面するさまざまな課題の解決に携わることのできる知性に育ってもらいたいと思います。

選択を行うのは個人や大学にとどまりません。日本社会さらにそれを含む人類社会もまた選択を行います。時間的な制約がありますから、日本社会の選択と人類社会の選択についてはひとくくりにしてお話しさせてください。

日本社会は、人類がその歴史において再び経験することがあってはならない悲劇――ヒロシマ、ナガサキ、ミナマタ、フクシマなど――を経験しました。その過程で、人生における喜びを大切な人たちと共有することのできない人々を多数生み出しました。日本社会はその一方で、人類がいずれ経験するであろう新たな困難――超高齢社会の到来――にもいちはやく直面しつつあります。これらはいずれも天災ではなく、すべて人間の作為と不作為の産物です。このような問題が日本社会においてのみ発生しうる問題ではない以上、これらの困難に怯むことなく知的勇気をもって立ち向かうことを選択し、困難の克服に直接・間接に寄与しうる学術的知見を広く人類社会に提供することは、国境を越える価値を持つのではないでしょうか。

複合的な現実を総合的に評価できるようになることが大切

簡単な答えがある訳ではありません。まずは視野を大きく広げて、社会が直面する複数の問題が互いにどのように関連しているのかを意識して、複合的な現実を総合的に評価できるようになることが大切ではないかと思います。なぜなら、視野が限られていては、一つの問題の解決を意図する試みが、他の問題の発生につながることに気付かないからです。たとえば、現世代が直面する困難を短期的に緩和できるならば、次世代に「負の遺産」を残してよいというものではありません。このことは、エネルギー供給から社会保障に至るまで、持続可能性が問われる問題について考えてみれば明らかでしょう。学問をするものが近視眼的ではその見識を問われることになります。

そして人類がグローバルな諸課題を共有する以上、みなさんには、それらを克服するために国境を越えて協力することのできる人材に育ってもらいたいと思います。グローバル人材とは、グローバルに通用する論理的思考を明確に言語化する能力を持ち、対話相手の背後にある価値観に対する感受性と想像力をそなえた人材です。自分と同じ年月日に、しかし地球上の別の地点で誕生した若者と、対話をする場面を思い浮かべてください。その対話相手と、人間として深く理解しあうことができるようなコミュニケーション能力をみなさんはお持ちですか。豊かな人生を送るには、豊かなボキャブラリーと想像力を身につけることです。

最後に、以下のことを強調して、私からの祝辞を結びたいと思います。

性別を問わず、国籍を問わず、障がいの有無を問わず、本学において学生生活を送ったみなさんが、周囲からその見識と判断力とを信頼される人材として、日本社会のみならず国際社会の選択を牽引する存在となることを、心から願ってやみません。

祝辞

東京工業大学栄誉教授
東京大学特別栄誉教授
大隅良典

本日はおめでとう御座います。新入生の皆さんにこれから始まる大学生活について一言お話しをしたいと思います。

科学者は社会的な存在であり生まれた時代と切り離せない

私は1963年ですから、今からもう半世紀以上前に東大に入学しました。私は3、4年生の学部時代、大学院の数年も東京大学教養学部、駒場キャンパスで過ごし、アメリカ留学を経て、本郷の理学部で助手、講師を経て1988年から8年間、再び教養学部で生物学の講義をしていました。研究を始めたのも、28年前にオートファジーという現象に出会い今も続けている研究テーマを開始したのも教養学部でした。その後は愛知県にある基礎生物学研究所を経て、現在は東京工業大学に籍を置いて研究を続けています。従って私は50年、基礎生物学の研究者としての道を歩んで来ました。その意味では広い社会を見てきたとは言えませんが、実に沢山の人との出会いによって支えられてきました。科学は個人の発想や作業が基本となりますが、同時に科学者は極めて社会的な存在なので、生きている時代と切り離すことはできません。また現代の科学は全てを1人でやれるものでもありません。

大学は時代とともに変わってきたこともありますが、本質的に何も変わっていないことも沢山あるように思います。これからの話は私が如何に模範的な大学生であったかということでは決してありません。今から振りかえってみて、自戒の念や反省を込めて君たちに是非考えて欲しいと思うことを述べさせて貰います。

君たちはこの数年、大学受験という極めて明確な目標を持って生活をしてきたと思います。しかしこれからは自分の目標や、そのために何をすべきか自分自身で判断して行くことが求められます。君たちはこれからの長い人生いくつかの節目に出会うことになると思いますが、その時誰かが明確な指示をくれるわけではありませんし、誰かの意見に従う必要もありません。選択の決断は全て自分の責任であると思って下さい。

その意味で教養学部は東大だけが持っている優れたシステムなので、2年間それを大いに生かして下さい。この2年の間に沢山の本を読み、沢山の人に出会うように努め、焦らずに様々なことにチャレンジして、自分の進むべき道を見極めて下さい。それが教養学部時代の素晴らしさです。この大学の素晴らしさは、よき友人、先輩に出会えることだと思います。きっと身近に凄いなと思える人に出会うことができます。それは長い君たちの人生にとって大変大きな財産です。できるだけ新しい友人を作って下さい。そして自分にはないものを持っている友人をもつことを勧めます。これまでの高校生活を引き継いだ分かり合える仲間は楽しいですが、思い切って、新しい友人、書物、まだ知らない世界を求めて下さい。

近頃私自身が痛切に感じる日本人に欠けている資質の一つは、コミュニケーションの能力だと思います。私達日本人は自分の考えや主張も何れ分かって貰えるだろうと思いがちで、それを他人に分かって貰う努力に関して大変遅れています。海外で話をするとそのことを痛感させられます。

第2の欠点は自分と違う考えを尊び、ヘテロさ、多様性を認めることが苦手だということです。欧米では子供の時から自分が如何に他と違うかを求められます。日本では反対にできるだけ人と同じであることが大切にされます。私はこの間、折に触れて研究をする上で、皆が注目している流行のことをやるよりも、人のやらないことをやろうと言うことを強調してきました。新しいことをやることは、少し勇気がいることにみえるかも知れませんが、新しい世界が拓ける可能性もそれだけ大きいのです。

君たち若い世代は、是非とも人生を長い時間軸で考えて欲しいと思います。この頃多くの学生諸君が人の役にたつ仕事をしたいといいます。この言葉を否定するのは難しく、一見素晴らしいことのように聞こえます。一方役にたつということがいささか免罪符のようで、一体役にたつとは何かを一人一人がきちんと考えているかというと、少し疑問に思えます。何となく数年でいい薬を作ったり、便利な製品を作りたいといったイメージに聞こえてしまいます。勿論それらも大事ですが、是非少し長い時間軸で社会と人生を考えて欲しいと思います。できたら自分の子供達、次の世代、さらにはこの地球の未来を考える時間を持って下さい。

膨大な情報に惑わされずに何をしたいかを見つけよう

現代は私が生きてきた戦後の復興の時代に比べると遙かに豊かになりました。しかしそれに伴って精神的にも豊かになったかといえばそれほど単純にイエスとは言えないように思います。私は最近、自分の生きてきた時代は良かったなと思います。生物学の分野でいえば、分子生物学が勃興し、新しい原理的な発見が相次ぎ、その黎明期で今ほど膨大な体系や権威が確立している時代ではありませんでした。図書館に行って先人の論文を見つける作業が必要でしたが、得られる情報も限られていました。一方今では、コンピューターの進歩により世界中の情報を瞬時に知ることができます。小さな携帯から瞬時に沢山の世界中の情報を得ることができます。それは素晴らしいと同時に、現代人の抱える深刻な課題でもあると思います。情報が膨大なので、とりあえず単純化された結論めいた情報

で分かったような気分にさせられてしまう面があります。じっくりと自分の疑問に向かい合うことが難しくなってきているように思います。膨大な情報に惑わされず、自分が何をしたいか、どう生きたいかをみつけて欲しいと思います。

若者が如何に溌剌としているかが、その社会の発展の大事なバロメーターだと私は思っています。科学者も君たちの一つの選択肢として科学の発展に寄与してくれる人が諸君の中から沢山生まれることを期待して挨拶とします。

平成 29 年度大学院入学式 総長式辞

東京大学総長
五神 真

本日ここに東京大学大学院に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

本年4月に東京大学大学院へ入学されたのは、修士課程が2,898名、博士課程が1,187名、専門職学位課程が334名、合計4,419名です。皆さんは、これから始まる学びと研究活動への期待に胸を膨らませていることと思います。

東京大学は、明治10年、1877年に創立され、本日、4月12日をもって、140周年を迎えました。一昨年は第二次世界大戦の終結から70年目でしたので、140年の歴史は、終戦をはさんで、前後おおよそ70年ずつに分かれることになります。

東京大学のはじめの70年は、明治の新たな開国の時代に国際社会で認められるために近代国家としての形を整え、それを担う人材を育成することが急務でした。そのために西洋の学問を旺盛に取り入れ、その中で、東洋と西洋の異なる学問を融合し新たな学問を創り出すという伝統が築かれました。しかしその後、日本は敗戦という大きな蹉跌を経験します。第二の70年は、そこからの復興から始まりました。20世紀後半は科学技術の革新を牽引力とし、工業化が進み、世界経済は飛躍的に拡大しました。その中で日本は高度経済成長を達成し、世界有数の先進国としての地位と平和な社会を獲得しました。ここでも東京大学は、最先端の学術研究を学んだ人材を社会に送り出し、大きな役割を果たしてきました。

しかし、この70年がずっと穏やかだったというわけではありません。特に2011年3月の東日本大震災は忘れられません。昨年は熊本県と大分県でも大きな地震が発生しました。これらの災害で犠牲となった方々に改めて哀悼の意を捧げます。先月11日に岩手県大槌町で行われた津波被害の慰霊祭に私も出席致しました。現地では復興に向けた懸命な活動が今も続いています。6年を経てもまだ道のりは長く、知恵と忍耐がいっそう必要です。東京大学では、地震研究所と史料編纂所が連携して、有史以来、日本で発生した地震について、学際的な研究を進めています。また、その他の分野でも災害対策や復興に貢献しうる学術研究が多く進められています。是非、こうした研究にも触れていただきたいと思います。

私は、知を創造し、知をもって社会に貢献できる人材を、「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。毎年入学式では新入生に「知のプロフェッショナル」となるために、東京大学で鍛えてほしい3つの基礎力について説明してきました。それは、「自ら新しい発想を生み出す力」、あきらめず「忍耐強く考え続ける力」、そして「自ら原理に立ち戻って考える力」です。さらに、これをベースとして、「多様性を尊重する精神」と「自らを相対化できる広い視野」を鍛えることで、他者を理解し、尊重しながら、知恵を出し合って一緒に行動する力を養ってほしいと思います。

では、「知のプロフェッショナル」を目指した研鑽を積んでいく中で、どのように学問と向き合っていけばよいのでしょうか。そのヒントとして、「知のプロフェッショナル」の先達の活躍から二つの例を紹介したいと思います。

「人がやらないことをやろう」との思いがノーベル賞に結実

まず、最初に紹介するのが、「オートファジー」の解明により2016年のノーベル生理学・医学賞を単独で受賞された、大隅良典東京工業大学栄誉教授です。東京大学でも本年2月に特別栄誉教授の称号を授与させていただきました。大隅先生には先ほど学部の入学式においで頂き、祝辞を頂いたところです。

オートファジーとは、細胞内の物質の分解システムのことで、細胞が自らの細胞質成分を分解し、栄養源等に再利用するというものです。これは細胞が示す生命の本質にかかわる現象です。

大隅先生は、東京大学教養学部基礎科学科、大学院理学系研究科で学び、ロックフェラー大学の研究員を経て、理学部植物学教室で助手、講師を勤められました。その後ご出身の基礎科学科の助教授として、独立した研究室を主宰されました。そこで大隅先生は、植物学教室時代から調べていた酵母菌を対象としつつ、「人がやらないことをやろう」との思いで、酵母の液胞の分解機能をテーマに新たな研究に着手します。分解酵素を持たない酵母を飢餓状態におくと、液胞に激しく動き回る小さな粒が蓄積することを発見されます。これが世界で初めて人間の眼で観察された、酵母のオートファジーの手掛りだったのです。この成果はその後約4年という時間をかけて、1992年に論文として発表されました。この発見が今回のノーベル賞の対象となった研究の端緒となりました。

大隅先生はその後、岡崎市にある基礎生物学研究所に移られ、オートファジー研究は一気に加速します。大隅先生のもとで、最初の助教授として動物細胞の研究を開始したのは現在大阪大学の吉森保教授です。さらに、現在東京大学医学系研究科教授の水島昇先生が大隅先生の門をたたきます。水島先生は、酵母と同時にマウスを用いた実験を行い、神経組織でオートファジーが正常に働かないと、マウスが神経変性疾患になることを示しました。酵母から動物研究に発展したことによって研究の裾野が広がりました。そして、オー

トファジーは、酵母からヒトに至るまで、あらゆる生き物にとって普遍的に重要で、生命維持に不可欠なシステムであることが明らかになりました。今では、病気の治療など医学への応用も期待されています。

酵母の液胞の研究は、もともとは大隅先生の好奇心から始まった純粋な基礎研究です。当時は、オートファジーを解析する手法も確立しておらず、その重要性も未知数でした。何かに使えるというのでもなく、そしてやり方もわからないというとても野心的な研究だったのです。それを、面白いという気持ちをドライビングフォースとして突き進めたのです。私はここにまさに学問研究の本質があると思っています。大隅先生は「役に立つかどうかなんて、あとにならないと分からない」と語っておられます。科学として本当に面白いものに夢中になり、観察に没頭し、そして独創的な研究に到達したことが、ノーベル賞につながったのです。

「うま味」の素を身近な好奇心から解明した池田菊苗教授

基礎研究に始まって、後に社会に大きな影響を与えた研究をもう一つ紹介します。私達が食事を楽しむ上でとても重要な「うま味」という美味しさをあらわす物質の発見です。1907年、東京帝国大学理科大学化学科の池田菊苗教授は、昆布だしの味の由来を突き止めたいと考えました。そして、昆布の成分を詳しく調べ、L-グルタミン酸ナトリウムという分子を昆布から抽出することにはじめて成功しました。そしてそれが「うま味」の素となる物質であることを科学的に解明したのです。

池田先生の研究は、ごく身近な食生活への好奇心から始まりました。昆布だしの味わいから、それまで知られていた「甘さ」、「酸っぱさ」、「塩辛さ」、そして「苦さ」の4つの味では形容しきれない味があると考えました。そこでもう一つの味が存在するのではないかという大胆な仮説をたてたのです。そしてこの仮説に立った科学的手法により、「うま味」成分はL-グルタミン酸ナトリウムであるということを突き止めたのです。こうして、曖昧な表現にすぎなかった味わいの感覚に着目し、科学的な推論と手法によって、日本人が感じていたその味の起源を明らかにしたのです。基礎研究と実生活とを繋ぐ、見事な研究事例でした。

現在、池田先生が提唱した「うま味」は、「甘さ、酸っぱさ、塩辛さ、苦さ」に続く5番目の味として世界的に認知されています。もとより「うま味」という言葉は日本語ですが、その発音がローマ字で表記され、「UMAMI」という用語で国際的に使われるようになりました。また、昆布だしに代表される「UMAMI」は和食の味の決め手となりますが、今やその和食もユネスコ無形文化遺産に登録され、日本から世界に発信する文化資源となりました。

これら二つの例はいずれも、歴史的な偉業です。研究の動機は、それぞれでした。大隅先生は未踏の領域に挑戦したいという強い気持ち、池田先生は味についての日常的な経験への興味でした。しかし、どちらの例も身近な、ありふれたものから研究は始まり、やがて社会に大きな影響を及ぼしていきます。

皆さんにはまず自分自身が「面白い」と感じる素直な心の大切さを感じてほしいと思います。この心こそが、知的好奇心の源であり、学問の出発点なのです。

そして、探求した先に何かが待っていて、それが他の人々と共有できるものになるかも知れないという直感も重要です。それは「面白いことになりそうだ」という感触です。その直感と好奇心が、研究の芽となるのです。こうして見つけた芽を大切にこつこつと育てることが研究することの本質なのです。

もちろん、新しいこと、人とは違うものにチャレンジすることは、並大抵のことではありません。失敗を恐れずに取り組む勇気が求められ、人から理解されない孤独な時間を過ごすこともあります。しかし、課題を克服して一つ一つ明らかにしていくことの喜びや感動は、何ものにも代えがたいことです。これは、私自身も研究者として、皆さんの少し先を歩いてきた先輩としての実感でもあります。大学院は、皆さんが自分の信じるところに従って邁進する学術の場です。「面白いことになりそうだ」「この先に皆と共有できる何かが待っているはず」と信じる気持ちを大切にしてください。

では、面白いと感じることを見つけ、それが他の人々と共有できそうだと直感したとき、次に、それを深めるにはどうすれば良いのでしょうか。

このステップは、一人では踏みだせないかもしれません。大学という場を存分に活用することが肝心です。その為に皆さんが今日からでもできることがあります。それは、自分で見つけ面白いと感じた、そのテーマについて解きたいと思う問いを見出し、まわりの仲間や先生たちに問いかけてみることです。講義の中や研究会等でも積極的に質問をするように心がけてください。

他者に問いかけることが多様性尊重の原点となる

この「問いかける」という行為には、とても大切な意味があります。問うことによって、自分が不思議だと思っていることを相手に分かってもらい、また、相手から聞き出したい情報を得ることができます。そしてなによりも重要なのは、自分のその問いが、そもそもどういう意味や価値を持っているのかということについて、他者との関わりの中で知ることができるということです。

いろいろな考えや価値観があることを客観的に見つめることは、多様性を尊重することの原点なのです。東京大学という場には、異なる経験や知識、考えを持つ人々が同じ場に集っています。その場を共有して、一緒に知を構築するという営みはかけがえのないものです。東京大学は創立以来、海外からの新しい知見を積極的に取り入れ、それを既にもっているものと融合させ変化させる中で、新しい独自の知恵を生みだして来ました。異なるバックグラウンドをもつ学生や教員が一緒になって、異質なものに触れながら問いを発し、議論する中から知を生みだす場が大学なのです。多様な価値観をお互いに認め合うことは

東京大学が誇るもっとも重要な伝統です。

ところで、専門的に疑問をただただ深く掘り下げていくだけでは、社会への大きな影響にはつながりません。見出したことの価値を他者へと伝える努力を忘れてはいけません。それを理解し価値を共有して支援してくれる仲間の存在も大切です。研究は個々の専門家の個別の活動で完結するものではありません。これまで知られていなかったことを社会に伝えて共有し、他者の理解を求め、共感の輪を広げ、価値が共有されていくプロセスを経て、疑問や発見は人類共通の知の資産へと発展していくのです。価値を伝えるためには、自分と他者の違いを意識し、自らを客観的に見つめる視点と、多様な価値を受け入れ、理解することも必要です。

偽りの共感などではなく「知に支えられた真の共感」を

今お話した学問と社会との関係をもう少し考えてみましょう。世界に目を向けると、環境破壊やエネルギー問題など、地球規模の問題が深刻さを増しています。2016年は世界で大きなうねりを感じる年でもありました。世界的な金融不安から始まり、世界各地での大規模テロ、イギリスの国民投票におけるEU離脱の決定、アメリカの大統領選挙とその波紋など、混迷は深まり、世界の調和的発展を脅かしかねない事態に対する不安と緊張が高まっています。人類が創り上げてきた、民主主義や資本主義といった社会・経済の基本的な仕組みそのものを、今後どのように調整していくべきかが問われています。

私が何よりも心配なのは、これらの事象の背景で、人間の知性の力に絶望し、知を否定するような動きが目立ってきていることです。

科学技術の革新は、SNSなど、旧来の新聞や電波による放送とは異なった、情報拡散の新たな手段を生みだしました。この新しい情報メディアは個々の人々の生活スタイルだけでなく、事実や真実をめぐる人々の感覚やそれを共有させる仕方をも変貌させつつあります。事実にもとづく反論や丹念な論証よりも、感情に訴える一方的な断定が大きなうねりとなり、偽りの共感を生みだしてしまうのです。このような事態を指して、「ポストトゥルース」の時代の到来を論ずる人もいます。新聞や放送といった既存のメディアを担ってきたプロのジャーナリストすら、新たな情報環境の影響から逃れることは難しそうです。新しい情報通信の環境を私達が人類社会をより良くするためにポジティブに活用できるのか、それとも制御ができず自滅してしまうのか、その分水嶺に立たされているのです。

こうした時代であればこそ、私達は知を放棄するわけには行きません。今こそ、知のもつ力を強く信じ、他者を尊重し、丁寧に言葉を吟味し、冷静な対話を通じて、確かな共感、すなわち「知に支えられた真の共感」を作りあげ、広げていく努力を惜しんではならないのです。大学はその中心となるべきであり、皆さんは私達と共に、その活動を支える仲間になったのです。

ここで、何よりも大切なのは、学問に対して自由であるということです。しかし、その自由は私達が、自然や人間や社会に対する謙虚さを疎かにしないという前提の上で保証されるということを忘れてはいけません。国際連合は2015年に17の目標からなる「持続可能な開発目標＝SDGs」を定めましたが、これは地球の有限性を認め、多様な自然環境や文化を尊重する中で、調和の取れた発展をもたらすための、行動指針を具体的に描いたものです。この目標は東大憲章の精神にも合致しており、東京大学は、今まさにこの目標を活用し、行動を起こそうとしているところです。謙虚さとは、控えめに物静かであれという意味ではありません。目をそらさず物事の本質にじっくりと向き合っていくということです。これは、「知のプロフェッショナル」として絶対に譲ってはいけない矜持であり、しっかり肝に銘じていただきたいと思います。

さあ、皆さんは今日から、私達の仲間となります。私は総長として、皆さんが安心して最高の学びと研究に打ち込めるように、大学院の環境を充実させていきます。また、皆さんが「研究する人生」に魅力を感じることができるように、研究者の雇用環境の改善にも全力で働きかけをしていきます。

大学で学び、研究する私たちの果たすべき役割は、学問を深め、新たな価値を創造することです。私は東京大学の次の70年を担う皆さんとともにその現場に立てることを幸運だと思っています。ともに夢を持って挑戦し、新たな伝統や学問を一緒につくっていきましょう。皆さんが元気に活躍されることを期待しています。

研究科長式辞

医学系研究科長
宮園浩平

東京大学大学院に入学および進学された皆さん、本日はおめでとうございます。また、入学生、進学生のご家族や関係者の皆様も本日の入学式をお喜びのことと思います。皆さんの新たな門出にあたり、心よりお祝いを申し上げます。

私の専門分野は医学・生命科学で、がん研究に長年携わって来ましたので、今日はがん研究の話から始めさせていただきます。がんの臨床は現在、革命的な変化の時期を迎えています。肺がんを例にあげると、ほんの十数年前までは、がんが進行し、手術で取りきれなかった場合、放射線や抗がん剤による治療では十分な効果は期待できませんでした。肺がんは長い間、最も治りにくいがんの一つとされてきたわけです。しかし、ある種の肺がんの中に、がんの進行に中心的な役割を果たす遺伝子の異常（これをドライバー遺伝子変異と呼びますが）、このドライバー遺伝子変異が肺がんで次々と見つかり、これらの異常な遺伝子の働きを抑える薬、例えばイレッサのような新しい薬が続々と開発されて来ました。その結果、かつては余命数ヶ月と診断さ

れたような肺がんの患者さんがこれらの薬によって劇的に改善するケースが見られるようになって来ました。もちろん完全に治癒することはまだ難しいですが、医学・生命科学の進歩により進行肺がんという難病を人類は徐々に克服しつつあると実感しています。

実験で得た事実に正直で謙虚であることが新たな道を拓く

こうした革命的進歩の原点となる研究は、実は50年以上も前にさかのぼります。私たちの体の中には細胞の増殖を促進する働きを持つgrowth factorというタンパク質が何種類も存在すること、これらのタンパク質は細胞表面のreceptorに結合して細胞の中に信号を伝えて細胞を増殖させることが明らかになりました。そして近年になってある種の肺がんではこれらのreceptorや細胞の中で信号を伝えるタンパク質の異常によって細胞の増殖が異常に強く起こることでがんが進行することが明らかにされたわけです。50年以上にわたる研究の成果により、肺がんの本態ともいうべき姿が次第に明らかとなって来たと言えます。こうした研究に東京大学をはじめ数多くの日本の研究者が携わり、ブレークスルーともいうべき成果をあげて来たことはよく知られています。

これらの研究に携わった研究者の多くは自らの研究成果が将来人類の役に立つことを望んでいたことは間違いありません。しかし、多くの研究者にとって日々の研究を行う原動力となったのは、実は生命の神秘に興味を持ち、それを解き明かそうという強い好奇心であったと私は思います。

素晴らしい研究者と出会うことは、私たち研究者にとって大きな喜びです。東京大学を卒業し、その後京都大学医学部教授として活躍され、残念ながら2005年に52歳で亡くなられた月田承一郎博士は私が尊敬し、憧れる研究者の一人でした。月田博士は細胞と細胞の接着、すなわち「細胞接着」に関する研究を行い、タイトジャンクションという構造の中に存在するオクルディンというタンパク質を1993年に発見しました。この発見のインパクトは大きく、オクルディンの重要性は世界で広く認められました。ところが数年経って、月田博士のグループで当時の最先端の手法でオクルディンを作らない細胞を作成したところ、当初の予想は完全に裏切られ、これらの細胞は正常の細胞と同じように細胞同士がしっかりと接着することがわかったのです。月田博士の自伝には、このとき彼らがいかに驚き、落胆したかが書いてあります。研究者としてはまさに悪夢のような出来事でした。しかしその後、月田博士たちは、オクルディンの他に細胞接着にもっと重要なタンパク質があるはずだと考え、あらためてこの幻のタンパク質を探し始めました。そして1998年になってタイトジャンクションに存在するもう一つのタンパク質クローディンの発見に成功したわけです。月田博士のこれらの発見は現在も世界中で高く評価され、多くの教科書に記載されています。

ここで改めて気づくことは科学の奥の深さです。大きな謎を解明したと思ったら、その先にもっと大きな謎が現れてくることは稀ではありません。研究を通して得られた結果が期待に反することはしばしばあることです。そうした時に実験で得られた事実に対し、正直で謙虚であることが新たな道を拓くことになります。私自身、予想と異なる実験結果が出て、途方にくれた経験が何度かあります。期待に反する結果を前に、正直で謙虚であることは実は容易なことではありません。しかし、既存の考えに捉われず、素直に結果を解釈することが、実は正しい結論にたどり着く近道であることは、多くの研究者が経験してきたことだろうと思います。

ここで少し私自身の若い頃の話をさせていただきます。私は36年前に医学部を卒業した後、内科医として勤務しましたが、しばらくして研究に真剣に取り組んでみたいと思いはじめました。私はこのころ、スウェーデンのグループが発表した「growth factorとがん」の関係を明らかにした論文を読み、衝撃にも近い感銘を受け、押しかけるような形でその研究室に留学しました。この時の研究生活は今から振り返ると夢のように楽しい毎日で、その経験が私の現在までの研究に対する思いに繋がっていると思っています。

異なる文化に触れる機会を数多く持ってほしい

このころヨーロッパ、とくに北欧の文化に触れたことも私にとっては貴重な経験でした。1980年代半ばにスウェーデンではすでに消費税は25%でした。来るべき高齢化社会を見据えた高度の福祉、すみずみまで組織だった医療制度、夫婦で育児休暇を取得するなど徹底した男女共同参画に驚いたことを覚えています。異なる文化に触れて私の考え方も大きく変わりました。皆さんには大学院に在学中に海外の研究者と積極的に交流し、また是非とも海外に行き、異なる文化に触れる機会を数多く持ってほしいと思います。また、今日、この入学式には海外からの留学生の方も多くおられますが、留学生の皆さんには日本の文化に存分に触れて、将来の糧としていただければと思います。

私は実は春の入学式で新入生の皆さんを迎えるのが今年で7回目となります。毎年、この壇上で皆さんの顔を見ながら、この中にもしかすると30年か40年後にノーベル賞をとる人がいるかもしれない、あるいは新しい学問分野を開拓するような大発見をする人がいるかもしれないと期待しつつ、皆さんを迎えています。研究に限らず様々な分野で成功を納める人を一人でも多く輩出することができれば、私たち教員にとって大きな喜びです。

今日ここに集まった皆さんの専門分野は様々で、皆さんの興味の対象は大きく異なると思います。しかしおそらく皆さんにとって共通する最も重要なことは、それぞれの分野において真剣に向かい合える研究テーマに出会うことだろうと思います。皆さんが興味を持てるようなテーマに出会い、稔り多い大学院生活を送っていただくことを私は心より期待します。

学ぶことは楽しいものです。皆さんが元気

に活躍されることを祈って、私の式辞とさせていただきます。

祝辞

地球環境ファシリティ議長
兼CEO
石井菜穂子さん

このたび、東京大学大学院に入学・進学された皆様、心からお祝いを申し上げます。

「Embrace the World」世界を抱擁する覚悟で学ぼう

今回、栄えある入学式にお招きを頂き、皆様にメッセージを伝える機会を頂戴いたしましたことを、大変光栄に思います。ここにおられる皆様のお一人お一人が、ご自分の専門分野で何をされたいかという、夢と覚悟を既にお持ちだと思います。私から皆様にお伝えしたいことは、一つです。「Embrace the World」、すなわち世界を、皆様のその腕で抱擁してほしい、世界を抱きしめる覚悟で、学びを進めて頂きたい、ということです。

私は、皆様が、ご自分の研究活動で世界の未来を変える覚悟で進んでいただけたらと思います。今この世界は、多くの困難に晒されています。世界で勃発し解決のみえない安全保障の問題、難民問題。世界中で見られる所得格差の拡大は、我々が慣れ親しんだ経済モデルがある時期から説明力を失いつつあることを顕わにし、多くの国で思いがけないポピュリズムの台頭と政治の混乱を招いています。そして地球規模の環境問題です。世界経済フォーラム――ダボス会議ともいいます――では、毎年、ビジネス・リーダーを対象に地球規模リスクのサーベイを行っていますが、今年サーベイが始まって以来初めて、環境リスク、例えば気候変動、異常気象、自然災害、水の問題などが、他の経済・政治リスクを圧倒しました。技術革新の分野では、第四次産業革命とも言われる波が進行中ですが、その潜在力をフルに活かせる土壌を世界が擁しているかどうかが、課題になっています。私が大学生の頃、明日は今日よりよい、世界は進歩している、と思っておりましたが、現在我々を取り巻いている状況は、そうした楽観を許しません。むしろこの世界は、途轍もなく難しい方向に、急速に流れていると思います。だからこそ、この東京大学で学ばれる皆様には、自分が世界の未来を、良い方向に変えるのだ、自分たちにはそれができるのだ、という気概で、学びを進めて頂きたいと思うのです。そういう願いを込めて、「Embrace the World」と申し上げました。

少し具体的な例を、私自身の経験も踏まえて、お話ししたいと思います。私は1981年に東京大学の経済学部を卒業して、当時の大蔵省(現在の財務省)に入った後、財務省と、IMF・世界銀行などの国際機関を、行ったり来たりして過ごしました。その間2006年には、東京大学の新領域創成科学研究科から博士号を頂きました。そして2012年に、現在務めておりますGEF（地球環境ファシリティ）という国際機関のヘッドのポジションに応募し、国際選挙を経て、GEFをリードすることになりました。

このことを皆様にお話しするのには多少のためらいがありますが、思い切ってお話しすると、私自身には、環境のバック・グラウンドはございません。それが、この機関（GEF）の仕事をするようになって初めて、地球環境の置かれた厳しい状況を知ることとなり、驚愕いたしました。

つい最近まで、人類は、「Holocene」(完新世）と呼ばれる地質時代にいると思われていました。この時代は、氷河期が終わり、気候が安定して、農業が出来るようになった時代です。そしてこの時代――11700年ほど続いたわけですが――は、我々が知るところ唯一の、人類の繁栄を可能にした時代でもあります。しかし最近多くの科学者が、我々はHoloceneを脱して、新たな世紀に入っていると考えています。彼らはこの時代を「Anthropocene」(人類の時代）と呼びます。人類の歴史上初めて、地球と人間の関係が変わった時代という意味です。それまで人類は、Holoceneという、類まれな安定的な地球環境のもと、順調な発展を遂げました。特に化石燃料をエネルギーとして使うことを学んでからは、その発展には飛躍的なものがありました。しかし1950年以降の爆発的な経済成長が、環境のコストを伴うことが顕かになってきました。環境のコスト、具体的には、温暖化、生物多様性の喪失、土壌の喪失、海洋汚染などです。急速な経済成長が、それまでの順調な発展を支えていた地球環境制度の機能を損ない始めたのです。つい最近まで、地球制度は、極めて強靭でした。人類が経済発展によってその機能を痛めつけても、驚くべき強靭さで、その衝撃を吸収してくれました。ところがここ20年ほど、その強靭性が限界に近づき、バックファイヤーし始めたと恐れられています。

Small World on a Big PlanetからBig World on a Small Planetへ

こうした現状を前に、2009年、Rockstromをはじめとする数人の科学者が集まって、地球制度の限界値――どの程度の環境悪化であれば、地球は人類の経済発展を支え続けられるか――を計測してみようと試みました。その結果は、気候制度、生物多様性、土壌喪失、化学物資循環の分野では、我々は既に安全圏とされる「Planetary Boundaries」を超えて、危険水域に入っているというものでした。この危険水域では、これまで地球が供与してくれていた強靭な環境は保証されず、突然の環境変化も排除されません。Holoceneの時代は、「Small World on a Big Planet」でしたが、今や我々は、「Big World on a Small Planet」に住んでいるわけです。科学からのメッセージは明白です。人間の経済活動と地球制度との関係を理解し、その関係を変えていかない限り、我々の繁栄は保証されないというものです。

世界のリーダーたちも黙ってみていたわけではありません。2015年には二つの重要な世界的な合意がありました。一つは9月のSDG（持続可能な開発目標）であり、もう一つは12月のパリにおける気候変動合意です。この二つの合意には興味深い共通点があります。先進国・途上国の別なく、全ての国がサイン・アップしたこと、そして政治リーダーだけでなく、幅広い市民層、アカデミア、そしてビジネスのサポートがあったことです。さらには、両合意とも、地球環境の安定なしには、人類の持続的な繁栄はないという認識を包含しています。

そして世界の志ある人たちの間で今、地球と人類の関係をどう見直せばいいのか、どのような経済・社会制度の転換が必要なのか、そのための世界的な動きをどう作っていけばいいのか、の議論が繰り広げられています。

しかし問題の根本的な解決は容易ではありません。第一に、科学のメッセージが広く科学者でない人々に共有されることのいかに難しいことでしょう。さきほど私には環境のバック・グラウンドがないと申し上げましたが、実際私がこの問題を知るようになったのは、GEFのヘッドになってからであり、事実の深刻さに衝撃を受けました。しかしそれ以上に震撼させられたのは、私が長く在籍していた職場では、私も含めてこうした問題に関心がなかったことです。これだけ情報のあふれる社会の中で、我々はいまだに、「環境派」いわゆる「グリーン」な人々と、そうした問題に関心のない人々とに分かれている。そうして重要な政策や事業決定を行っているのは、主として「グリーンでない」人々です。これは非難ではありません。私自身が長いことそうしたグループに所属していましたので、彼らに関心を持ってもらうことの難しさを実感しております。

そして第二に、地球環境問題は、いわゆる「Tragedy of Commons」――公共財の悲劇――の最たるものだということです。「Tragedy of Commons」とは、共有の牧草地に村人が羊を入れるとき、一人ひとりは一匹でも多く入れたいというのが合理的な行動ですが、皆がそう動いた結果、羊が過剰になり、牧草地が枯れて、皆が損をするという例です。地球環境も同じで、皆が自分の利益最大化のために地球環境をむさぼった結果、――それは現在の経済システムの下では当然のことなのですが――、地球環境というまさに「Global Commons」の機能を損ない、人類全体が持続的な発展の基礎を失うという悲劇に晒されています。

Tragedy of Global Commonsの解決策を見出すことは、容易ではありません。現在の危機、すなわち我々の現在の経済発展と、それを支えてきた地球制度との衝突を回避するには、経済制度の根本的な見直しが必要です。例えば農業です。農業は、森林の農地への転換を通じて、既に大きな環境破壊の要因となっていますが、これからさらに増える人口を、環境を悪化させずに食べさせていくためには、農業の在り方の抜本的な変更が必要です。エネルギー制度はいまだ温暖化ガスの最たる供給源ですが、再生可能エネルギーへの転換をスピード・アップさせる必要があります。また都市化が急速に進む中で、都市の果たす役割もおおいに変わってきております。そして勿論、現在のリニア―な経済モデルをいかに循環的なものに変えていくかという大きな課題があります。政策、ビジネス、市民が一緒になって動いていかないと、経済制度そのものの根本的な変更はできません。個人個人は、現行の経済制度のもとで合理的な判断をしているわけですから、制度変更には、関連するアクターを、一度に動かしていく必要があります。「Tragedy of Global Commons」の克服の難しさは、政治のリーダー、政策執行者、ビジネス、市民の「共同体」をいかに作っていけるかという問題に帰着します。

科学と政策とビジネスの融合で「公共財の悲劇」の解決を

一例を挙げましょう。パームオイルの生産は、インドネシアの熱帯雨林の伐採の最大要因になっています。伐採を食い止めるため、大手の生産者、小規模農業者、トレーダー、金融、市民団体、そして消費者グループが一体になって、乱伐採、乱生産を止めるための共同体を作ろうとしています。要になるのは、土地の使用権を決める政府です。志のある企業グループと乱伐採を止めようという地方政府の間で、こうした「共同体」ができつつあり、国際的な支援もこうした考えを支援する方向に向かっています。同じような「共同体」が、意思のある市長さんの集まりや、再生可能エネルギー100%転換を目指す企業グループなど、各所に見られるようになってきました。

私の現在の仕事は、地球環境と人類の持続的繁栄の両立を図ることであり、そのための経済制度の抜本的な転換を進めることであり、今申し上げたような「共同体」の試みを支援していくことです。その土壌作りのため、最近では、「Global Commons」についてのキャンペーンを開始しています。そして志をともにする政治リーダー、政策者、企業人、アカデミアがこうした活動の推進力になっています。

私自身、この仕事に携わるようになって、懸念していることがあります。地球環境制度と両立する経済制度をどう構築していくか、といった議論は、政府、国連関係の会議、ビジネス中心の会議、アカデミアを交えた会議など、あちらこちらで行われるようになっています。しかし、そうした政策議論の場、特にルール作りに関係するような重要な場面で、日本人の活躍が極めて限られているように見えることです。これには幾つか理由があると思いますが、その一つは、日本社会の成り立ち、企業や官庁の組織が縦割りになっていて、横の連携を必要とする問題に機動的に対応することが難しいということかと思います。特に「Global Commons」の問題は、科学と政策とビジネスを、同じテントの下にもってきて一緒に解決策を構成していく必要があります。アカデミアの分野においても、日本の学術は分野融合的な領域において遅れをとっていると言われております。地球制度そのものが、幾つもの学術分野の融合するところですし、経済制度との整合については、自然科学と人文科学の融合が必要となります。こうした分野融合的な領域における活躍は、我々の経済発展を「Planetary Boundaries」の枠内に収めるためのシステム変更を模索するときにも、SDGを追及するときにも、必要不可欠です。

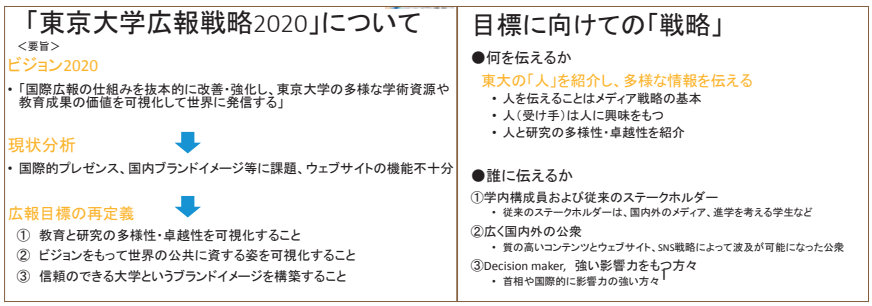
冒頭、皆様には「Embrace the World」を志して頂きたいと申し上げました。今後とも人類が、「Big World on a Small Planet」であることを認識して持続的に繁栄するために、そしてそれを目指した世界のルール作りに日本が貢献するために、皆様には世界を視野に入れた活動を進めて頂きたいと思います。世界で何が起こっているのかを、常に考えて頂き、さらにご自分の研究が、世界の未来をどのように変えられるのかを、常に求めて頂きたいと思います。そしてご自分が、いずれその場に立たれたときに、思う存分影響力を発揮できる力を付けていって頂きたいと思います。

本日はおめでとうございます。

式典写真:尾関裕士

～広報戦略本部からのお知らせ～

東京大学 広報戦略2020 ～「ビジョン2020」実現へ向けて～ ってナンデスカ?



※全文は「東大ポータル」の「公開フォルダ」＞「会議資料」で読めます。

このほど、「東京大学ビジョン2020」に連動する「東京大学広報戦略2020」を広報戦略企画室がまとめ、科所長会議（1月10日）と事務長会議（2月24日）の場で報告しました。この戦略の背景と意義、行間にこめた思いについて、策定に中心的に関わった両先生に語ってもらいました。キーワードは「顔」、ではなく、「人」です。

「分散型」から「集積拡散型」へ

――戦略策定までの経緯を教えてください。

横山●昨年3月、広報戦略企画室が発足しました。東大全体の広報を進めるための戦略を整備したいという総長の要望を受けての措置でした。初代室長の武田洋幸先生から、エビデンス・ベースの戦略を書くよう託され、2人で手分けして調査を始めました。

まず、現状の広報体制を把握しようと、5～6月に各部署を回りました。計17セクションに各1～2時間いただき、課長クラスの方を中心に話を聞きました。そこで浮かび上がったのは「分散型広報」という特徴です。随所で情報を発信していますがあくまで個別発信。全体として見ると、本部が情報を集めて拡げる「集積拡散型」の広報が必要だと感じました。

もう一つ、大学の目標に沿って広報するため、社会の関心と乖離する傾向があると思いました。見る範囲の狭い「ミクロ型広報」です。もう少し大きな視野で社会の関心に基づく「マクロ型広報」が必要ではないか、と。たとえば時事問題について大学側が情報を提供するというようなことです。

マッカイ●私は、民間のインターネット調査を用いて東大のイメージを調べました。結果、卓越性は十分認められていましたが、多様性はそうではなかった。「エリート臭が強い」「象牙の塔」「エネルギッシュではない」といった声も印象的でした。社会から遠い存在で、中身が知られていない。学内の多様性を可視化してイメージを更新する広報が必要だと思いました。

一方で、海外の潮流を調べるため、欧米の4大学を訪問し、理事や広報担当者に会って、広報活動のやり方を聞きました。そこで知ったのは、欧米のトップ大学は学内にライター・編集者を5～6人置いて総合ニュースサイトを展開しているという事実です。研究成果の発信だけでなく、社会で必要なテーマを読み取り、関係する先生を取材して解説記事を迅速に社会に出す体制を確立していました。

横●欧米の新聞社では1社に1人程度しか科学記者がいないので、大学が情報を発信しないと記事になりません。大学が発信する一次情報の重要度が増しているのは確かです。

「人」の発信を信頼につなげる

横●そうした調査と検討を経て、広報目標を再定義しました。多様性・卓越性の可視化、世界の公共に資する姿の可視化、信頼できる大学というイメージの構築の3つです。広報戦略の中心として据えたのは、人を通じて情報を伝えること。卓越した人、多様な人、公共に資する人、信頼できる人……そうした集合体である大学を見せようと思いました。たとえば一般の人に知っている東大の先生を聞いても名は挙がらないでしょう。「人」の発信は不十分だったと思います。

マ●ブランド調査で見えたのは、社会からの信頼が高くないことです。信頼の獲得は価値の共有から始まり、価値共有を支えるのは人柄と能力。大学の先生は、能力は認められていますから、あとは人柄です。

大きな絵は描けたので、次はウェブ、SNS、クライシスの戦略です。今後は新室長の須田礼仁先生と戦略を進めていきます。

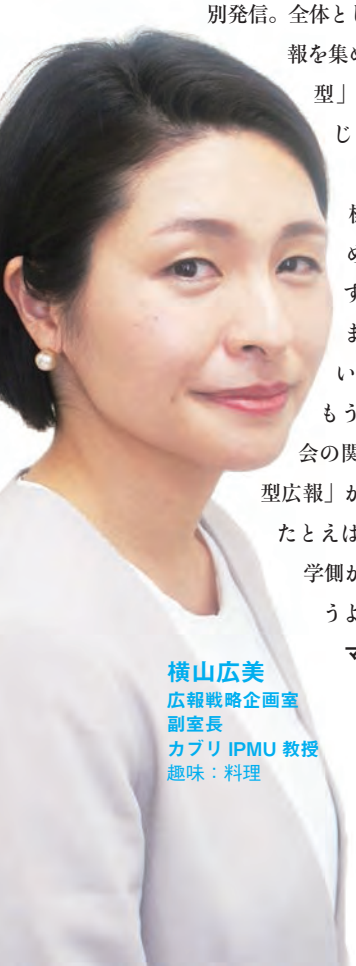
――議論で激しくもめたことはありますか?

横●特にないかな。二人ともこの10年、広報に携わってきましたが強みが異なる。私は素粒子実験を経て現在の専門は科学論。科学者の情報発信と信頼問題を研究しています。ユアンさんは東アジアの歴史が専門で、国際的動向やネットワークにも関心が強い。室長のマッチングが絶妙でしたね。使命が重大すぎて2人でもめる余裕はなかったのかも。

――今後の具体的展開を教えてください。

マ●まずは近年の課題だった日本語サイトのリニューアルを優先します。そして、核となるキャッチコピー選定、「人」紹介記事の量産、「顔」となるニュースサイト構築です。サイトへのアクセス数は今も多いもののSNS登録数は世界のトップ大学と比べると非常に少ないのでそこも強くしていきたい。

横●本部の広報が強くなれば、部局が行う広報もさらに広がるはずです。部局と本部が高め合う関係になりたいですね。



横山広美
広報戦略企画室
副室長
カブリ IPMU 教授
趣味：料理

ユアン・マッカイ
広報戦略企画室
特任助教
趣味：ジム通い

～リサーチ・アドミニストレーター推進室からのお知らせ～

University Research Administrator

URA認定制度を始めました

～研究力のさらなる向上を目指して～

今回認定されたURAの皆さん（●はシニアURA）

- 佐藤立子さん 宇宙線研究所
- 都竹順子さん 医科学研究所
- ●古宇田光さん 物性研究所
- ●鈴木博之さん 物性研究所
- ●野上 識さん 理学系研究科
- ●橋本誠一さん 総合文化研究科
- ●林 輝幸さん 理学系研究科
- 中川清美さん 医科学研究所
- 西村 薫さん 医科学研究所
- 大内聡美さん 工学系研究科
- 岡田美和子さん 医科学研究所
- 後藤孝明さん 医学部附属病院
- ●保立和夫 URA 推進室長
- ●五神 真 総長
- ●小関敏彦 URA 推進室副室長
- 馬場良子さん 理学系研究科
- 村上壽枝さん 政策ビジョン研究センター
- 湯越智子さん 工学系研究科

東京大学は、研究力強化に資する人材の育成・確保を目的に、リサーチ・アドミニストレーター（URA）制度をスタートしました。本学においてURAとは、学術研究に係る諸活動を教員・研究員と共に幅広く推進・支援し、学術研究を安定的かつ継続的に進展させることを目的として、高度な専門性を持って主体的に業務を行う能力を有する者として定義しています（「東京大学リサーチ・アドミニストレーター実施方針」参照）。本学では、URA推進室が中心となって、URAの育成・確保、さらには全学的な研究力強化に向けたURA制度の構築を進めており、URA認定制度は、その制度の中でも中心となるものです。本認定制度では、研究力強化に資する人材をURAとして可視化することにより、本学におけるURAの質の確保、向上及びURA業務の明確化を行うと共に、URAを通じた全学的な研究力の強化及び研究マネジメントの向上を図ります。

平成28年度には、本学として初となるURAの認定を先行的に行い、学内教職員から15名のURA（シニアURA5名、URA10名）を認定いたしました。3月13日には安田講堂特別会議室にて、URA認定者に対し五神総長より認定証が授与された後、本学の研究力強化について総長とURAとの懇談を行い、活発な議論が行われました。

本認定制度は平成29年度より本格実施し、将来的には、本部や各部局、又はそれらを横断するような取組においてURAが幅広く活動していく予定ですので、今後のURAの活躍にご期待ください。

15人の職名の内訳は、特任研究員6、学術支援専門職員5、技術専門職員2、特任専門員1、特任専門職員1でした。

認定証授与後の懇談会の様子。

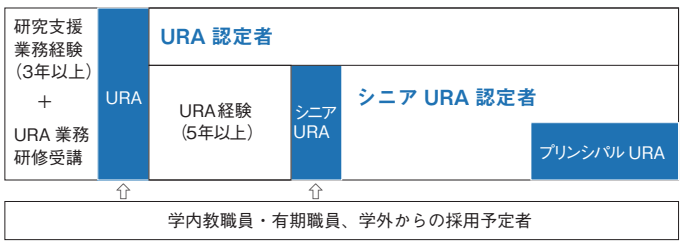
URA認定制度の概要

所属長推薦に基づき、研究関連実務に関する経験及び専門的な能力等を認定し、東大のURAとして位置づける

能力・経験に応じて、「URA」「シニアURA」「プリンシパルURA」の称号を付与する

スキル標準等に準じた研修を組み合わせてURAの質の確保・向上を図る

認定審査のプロセス



本学のURA認定を受けるには、まず3年以上の研究支援業務と研修の受講が必要。URA候補者は、所属長の推薦に基づいて部局単位で認定の申請を行い、書類審査・面接審査を経てURAとして認定されます（認定は年2回実施）。URAとしての経験が5年以上になるとシニアURA認定の審査を受けることができます。またシニアURAの中からURA全体を統括していくプリンシパルURAについても輩出する予定です。

～国際本部からのお知らせ～

戦略的パートナーシップ大学
プロジェクトが第2期に突入

～互いの強みを活かす協力関係へ～

「戦略的パートナーシップ大学プロジェクト」では、第2期の4年間（平成29～32年度）において、平成28年度までの第1期の成果に基づいて共同研究を基盤とした部局での連携を強化し、学生交流等をより戦略的に進めます。

オーストラリア国立大学、スイス連邦工科大学チューリッヒ校、マサチューセッツ工科大学、北京大学、プリンストン大学、ソウル国立大学、スウェーデン大学群、清華大学、カルフォルニア大学バークレー校、ケンブリッジ大学の10大学とは、戦略的なパートナーシップ大学として、国際本部グローバルキャンパス推進室とともに部局共同チームを大学毎に組み、互いの特徴を生かした活動をリードしていきます。戦略的パートナーシップ構築を見通せる他の大学群についても、活動をサポートしていきます。

教職員・学生の流動性を高めながら、本学の国際的プレゼンスを強め、世界の課題解決につながる分野横断的な教育研究交流を牽引します。

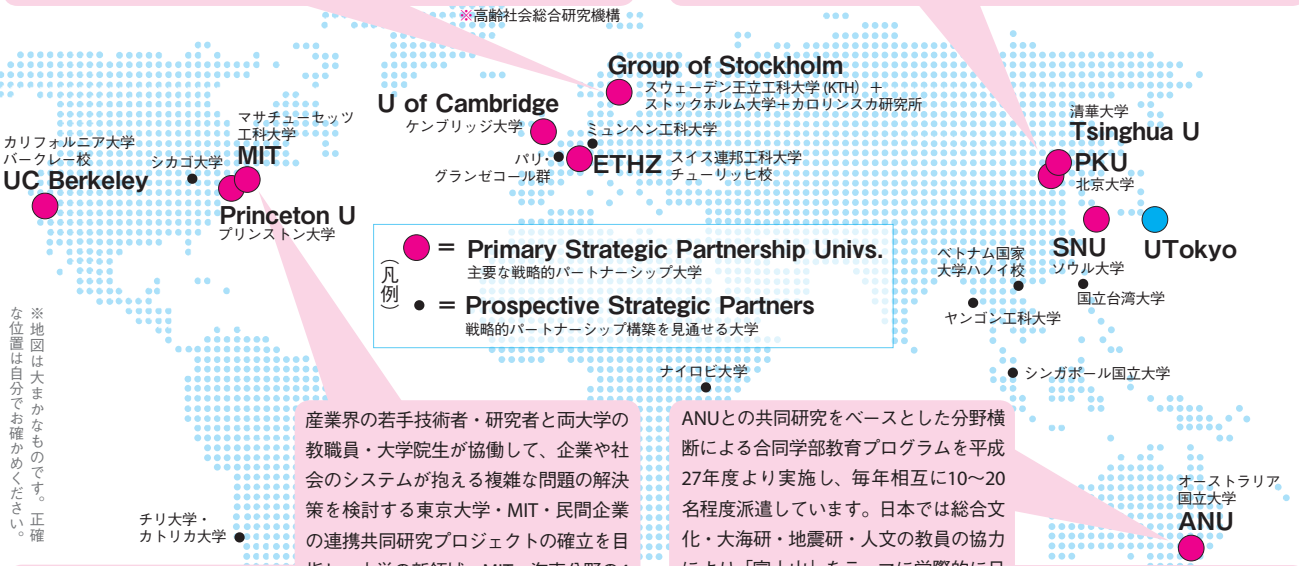
THE UNIVERSITY OF TOKYO with

⇩ 第2期のパートナーと主な取組み ⇩

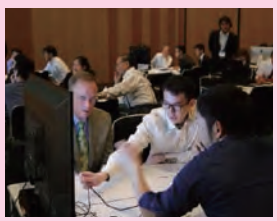
第1期にKTH（工・農）、ストックホルム大学（教育・新領域）がそれぞれ採択されたことを機に、先方大学や学内での調整が進み、ストックホルムに位置する3つの機関（ストックホルム大、KTH、カロリンスカ研究所）と本学との4者による戦略的パートナーシッププロジェクトが開始され、学生交流、共同研究、FD等を推進しています。第2期には、新たに医・先端研・IOG※も参画し、「Healthy Ageing」をテーマに分野横断的に交流を進めていきます。日瑞の友好な関係性も手伝って、今後大きな発展が期待されています。

※高齢社会総合研究機構

北京大学とは、長きに亘る人的交流を基盤とする多様な教育研究交流が行われており、本プロジェクトには法・工・総合文化・公共政策・数理が参画しています。その交流は教員・学生の交流に留まらず、事務職員の交流にまで発展しています。平成27年度に北京大学から20名の幹部職員が本学を訪問し、翌年度には本学の事務職員16名が北京大学・清華大学を訪問し、お互いの業務内容等の理解を深める機会となり、今後も交互に実施していく予定です。また、北京在住の本学卒業生組織「北京校友会」との連携も強化しています。



※地図は大まかなものです。正確な位置は自分でお確かめください。



産業界の若手技術者・研究者と両大学の教職員・大学院生が協働して、企業や社会のシステムが抱える複雑な問題の解決策を検討する東京大学・MIT・民間企業の連携共同研究プロジェクトの確立を目指し、本学の新領域・MIT・海事分野の4法人とパイロットプログラムを実施しています。さらに、同大学の機械工学学科とのアジア圏初となる学部生の単位互換を伴う交換留学に係る覚書を締結した他、今後は新領域・情理・工・数理・生研が実施してきたワークショップ等を部局横断的に実施して連携を拡大していきます。

ANUとの共同研究をベースとした分野横断による合同学部教育プログラムを平成27年度より実施し、毎年相互に10～20名程度派遣しています。日本では総合文化・大海研・地震研・人文の教員の協力により「富士山」をテーマに学際的に日本社会を考察し、オーストラリアでは考古学から先住民史と文化を学ぶなど、異文化交流のみならず学術的な交流を行い、本学学生のコミュニケーション能力が短期間で飛躍的に向上しました。さらに、公共政策・理の学生がTAとして参加しており、TAの教育にもつながっています。

ひょうたん島通信

大槌発! 第37回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

鴫(しぎ)来たりなば春遠からじ

早川 淳 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 生物資源再生分野 助教

オオセグロカモメ達が岩場で何かを奪い合う貴重な捕食シーンかと思いきや…。

このコラムのタイトルにもなっている“ひょうたん島”は当センターの目の前にある蓬莱島の愛称ですが、センターの前に位置する港からこの島へと続く堤防が2013年に再建されました。私はバードウォッチングが趣味なもので、お昼休みや夕方に時々この堤防から海鳥を双眼鏡で観察していたのですが、ある時、ウミネコなどのカモメ類が堤防周辺でエゾアワビやウニ類といった底生動物を捕食していることに気が付きました。私の研究テーマは、貝類やウニ類などの生態でして、バードウォッチングはあくまで趣味であったのですが、底生動物の生態学的研究をする上で鳥類による捕食もモニタリングする必要性が生じたのです。そんなわけで、大槌に滞在中はほぼ毎日“バードウォッチング”をしています。

基本的にはカモメ類の出現状況のモニタリングと行動観察が主ですが、堤防周辺に出現する鳥類相もバードウォッチャーの性として記録しており、これまでに25種の鳥を確認しました。堤防周辺ではそれぞれの鳥が様々な行動をしています。潜水して魚を捕えるウミアイサというカモの横に餌を奪い取るべくウミネコがぴったり併走していたり、ハシボソガラスが空中からクルミを何度も落として割ったり、ある夕方に堤防上を歩いていると何と堤防の上で寝ていたカルガモが驚いてけたたましい羽音と共に飛び去ったりと見ていて飽きることはありません。冬のある日、カモメ類が岩場に集まって競い合うように海に飛び込んでいるのを目撃し、「これは何か重要な捕食シーンなのでは!?」と思って雪の中30分ほどビデオを回し続け、コマ送りで何度も映像を確認した結果、捨てられた魚の頭を奪い合っていただけなことが判明し、がっくりきたこともありました。

この“バードウォッチング”で面白いのは、季節によって出現する鳥が変わっていくことです。カモメの中にオオセグロカモメやセグロカモメが増えると真冬になったのだなと感じますし、美しい羽色のシノリガモやスズガモが見えなくなると冬の終わりを感じます。このコラムが掲載される頃には、大槌でも桜のつぼみがほころび始め、北へと帰る途中、羽を休めるためにふらっと現れるキアシシギやキョウジョシギが観察されていると思います。個人的には、何時かものすごい珍鳥が出現して欲しいなぁと思いつつ、今日もカモメ達を観察しております。

調査船 弥生のつぶやき

6回目の3月11日

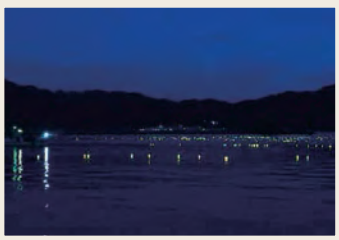
国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早3年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

穏やかな日差しに包まれた平成29年3月11日、大槌町役場において、五神総長、古谷理事はじめ本学関係者ご臨席のもと「大槌町東日本大震災津波追悼式」が執り行われました。祭壇には、東日本大震災の犠牲となられた大槌町の方々の人となりについて、聞き取り調査を基に記された「生きた証回顧録」が、参列者の献花とともに奉納されました。

東日本大震災発生時刻の午後2時46分には、大槌町内の防災行政無線が一斉にサイレンを鳴らし、追悼式参列者はもとより、大槌町に生きる全ての人々が、犠牲となられた全ての方々へ一分間の黙とうを捧げられました。

その日の夜、赤浜では、大槌町で犠牲となられた方々のお名前がお一人毎記された灯篭1300個が、追悼の思いと共に流されました。

灯篭が一つ、また一つと、私の周りを通り過ぎ、沖へと流れていきます。私も心からの追悼の思いを籠め、灯篭を見送りました。



美しく厳かな灯篭の明かりが、私の周りを通り過ぎていきます。

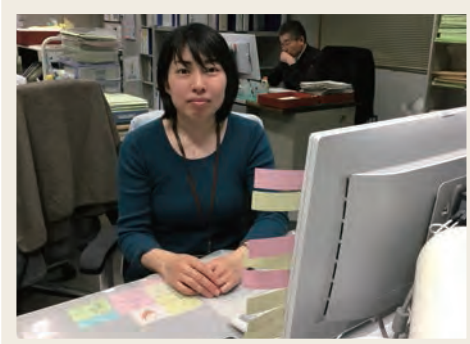
制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

ワタシのオシゴト 第133回

RELAY COLUMN

理学系研究科等経理課
研究支援・外部資金チーム　主任
弥冨有希子

カケンヒ「だけ」やってます



デスクにて。奥におられるのは副課長です。

科学研究費助成事業（科研費）の申請や執行の支援「だけ」を担当してそろそろ5年になります。と言うと、「さすがに飽きたでしょう」とよく言われるのですが、実はそうでもありません。東京大学理学系研究科等に所属する研究者が受け入れている科研費は、なんと国全体の配分額の100分の1以上！　ありとあらゆる制度の事例があるので、困りごとには事欠かず、何年やっていても日々新しいことに出会える業務です。正直飽きる余裕はありません……。

昨年4月に育児休業から復帰してはや1年。もうすぐ2歳になる娘の子育てと仕事との両立はやはり大変で、急な遅刻早退やお休みをいただくことも多く、あたたかく応援してくださる上司や同僚のみなさま（と夫）には感謝してもしきれません。

研究者にはより使いやすく、経理はより適切に。ときにその狭間で苦悩することもありますが、女だらけの“科研費島”は今日もかしましくやっています！

チームの歓迎ランチ@山上会館にて。

得意ワザ：愛があったりなかったりするツッコミ
自分の性格：完璧主義と見せかけて相当ずぼら
次回執筆者のご指名：斎藤美奈さん
次回執筆者との関係：同期で年下の先輩ママ
次回執筆者の紹介：英独仏の3か国語を操る小さな巨人

シリーズ　第1回

連携研究機構

マテリアルイノベーション研究センターの巻

話／センター長
雨宮慶幸先生

日本が得意な物質科学をより強く

――連携研究機構の第1号となるセンターですね。

「学内随所で行われている物質科学研究の連携を高め、学外との連携を進める機構です。部局を越えてプロジェクト予算を獲得し、学外機関との窓口として機能していく。昔から日本が得意としてきた物質科学、材料科学を強化し、五神総長の「つくば-柏-本郷イノベーションコリドー構想」※を支える組織でもあります。略称はMIRC。昨年7月に新領域創成科学研究科と物性研究所を中心に立ち上げ、12月には工学系研究科が加わりました。他の部局の参加も予定されています」

――MIRCはどんな研究を進めるのでしょうか。

「一例としては、ものづくりとAIの融合です。日本はAIをものづくりと組み合わせることで強みを発揮するはずですから。今すでに進んでいるのは、ポリマーなどのソフトマテリアルを使った研究です。ウェアラブルのセンサーに太陽電池をつけてワイヤレスで送信するといった研究では、新領域の竹谷純一先生や工学系の染谷隆夫先生がキーパーソンとなっています。新物質の開発には物質構造や機能の解明が重要ですから、物性研の先生方にはその部分を期待しています」

――発足後の手応えと今後について教えてください。

「この8ヶ月で行ってきたのは、運営上のルールづくりと関連部局との情報共有です。運営委員会ができましたので、4月から活動を本格化します。新しい仕組みを作ると情報の齟齬や新たな課題が頻出しますが、そこをうまく調整して研究者間の連携による相乗効果を出すのが私の使命です。マテリアル研究の世界の動向を見誤らずに方向性を示すことも重要ですね」

――先生は産学協創も強力に進めてこられたとか。

「はい。たとえば、タイヤでは、ある周波数に対してはエネルギーロスを減らし、ある周波数に対しては増やすことが必要です。相反する要求に応えるにはどんなナノ構造・ダイナミクスが必要かを検証し、住友ゴムと「エナセーブ」※を共同開発しました。研究を応用につなげることも将来的にはセンターの軸の一つだと思います」

――現在の心境を言葉で表していただけますか。

「「新しい酒は新しい革袋に盛れ」かな。聖書の言葉です。古い袋では漏れてしまうので新しい袋を準備すべきです。組織に横串を通す際に重要なガバナンスの問題をクリアし、研究者が力を発揮しやすい「革袋」を作りたいですね」

※つくばエクスプレスに隣接する連携拠点（コリドー化）の実現で「知の協創プラットホーム」を築く構想。

※福山雅治さんのCMでおなじみ！

あちこち東京大学

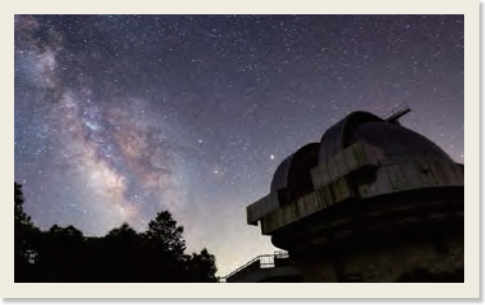
第16回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

理学系研究科附属
天文学教育研究センター
木曽観測所の巻

所長・
理学系研究科准教授
小林尚人

観望性と利便性に富む信州の天文台



天の川を望むシュミット望遠鏡ドーム。

「木曾路はすべて山の中である」とはよくいいますが、木曽観測所は文字通り360度を山々に囲まれた静かな尾根の上にあります。東京から「あずさ」「しなの」と特急電車を乗り継いで約3時間、中山道の関所があったことで知られる信州の木曽福島に到着し、さらに車で20分あまりで標高1,130mの観測所です。近くには御嶽山と中央アルプス、遠くには穂高連峰と抜群の眺望が開けます。

ここは東大が現在国内に持つ唯一の天文台で、1974年の開所以来、天文学の研究、開発、ならびに教育の現場として活躍しています。ここに観測所を構えた理由は、ひとえに木曽の夜空の暗さ、そして空気の清澄さにあります。都会では見えない天の川がくっきりと印象的に見えますが、比較的簡単に行ける場所で、この観望・観測環境が得られる利便性が木曽観測所の大きな魅力です。

観測所の主力は、「シュミット望遠鏡」と呼ばれる貴重な口径105cmの超広視野望遠鏡です。現在、高感度センサーを焦点に敷き詰めて、世界で初めて動画で天体を探査する「Tomo-e Gozenカメラ」を開発中で、所員と日本中の多くの若手研究者ががんばっています。

観測所には、30名以上が宿泊できる施設が併設されています。春は新緑と青空に白い雪山を望み、秋は紅葉を楽しめます。東大の関係者のみなさまには是非一度お越しいただければと考えております。

1

2

3

4

1. シュミット望遠鏡と木曽町日義(ひよし)の「巴ちゃん」。**2.** 年に一度全国の高校生が集まる観測実習「銀河学校」。**3.** 構内に自生するササユリ。**4.** 秋の紅葉とシュミットドーム。

www.ioa.s.u-tokyo.ac.jp/kisohp/

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives

ぶんしょかん

第7回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介

夏目先生の教歴をたしかめませう

夏目漱石が『吾輩は猫である』を執筆したのは1905年から1906年にかけてのこと。東京帝国大学で英文学の教鞭をとりながら、『ホトトギス』に連載したことはよく知られています。けれども、漱石が本当に東京帝国大学で教えていたかどうか、どのようにして確かめられるのでしょうか？　単純な事実確認ではありますが、どの資料を見たらいいのでしょう？

東京大学文書館は、大学一覧とよばれる種類の文献を所蔵しています。これは、東京大学全体についての公式の情報をまとめた刊行物です。大学のスタッフ、科目、授業や試験の規程、附属の博物館や演習林などの概要、学年歴や学位についての規則、さらには学生や卒業生の名前まで書かれています。

それでは、漱石が『吾輩は猫である』を執筆した時期の『東京帝國大學一覧』（従明治三十八年至明治三十九年）を開いてみましょう。第12章「文科大學」に、英吉利文學の講師として、東京出身の平民「夏目金之助」の名前が見えます［p. 128］。もう少しページをめくると、漱石宅で木曜会をはじめた鈴木三重吉、そして同じころに出入りをしていた小宮豊隆や森田草平（米松）も、学生としてしっかり名前が掲載されています［「學生生徒姓名」, pp. 68-69］。どうやら漱石と門下生には「経歴詐称」はなかったようですね。

漱石が教鞭をとった時期の『東京帝國大學一覧』。

英吉利文學の講師として夏目金之助の名前が見える。

『一覧』は、東京大学が帝国大学と呼ばれるようになる前から、『東京開成学校一覧』や『東京大学法理文三学部一覧』などとして刊行されています。『一覧』が出されなかった年には、少し内容がつづめられた『要覧』が作られています。また、英語版も“calendar”というタイトルをつけて出されていました。これらは、東京大学に関する歴史的な公式情報を知りたいときには、まず参照できる便利な資料です。（文書館特任助教・宮本隆史）

東京大学文書館
www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

インタープリターズ・バイブル

第117回

情報学環教授・学環長
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門
佐倉 統

ロボットと消しゴム付き鉛筆

物心ついたときに鉄腕アトムや鉄人28号が活躍していた世代だから、ロボットやAIには格段の興味を持っている。とはいえ工学的なことは専門外なので、もっぱら、社会的・文化的状況に目がいく。その点で不思議なのは、なぜロボットやAIが人間の脅威として語られることが多いのかである。計算が早かったり囲碁や将棋が強かったりするぐらいで、人間の他の能力が凌駕されるわけでもあるまいに。

そもそも、関数電卓や、スマホの囲碁・将棋アプリには誰も脅威など感じない。「脅威の閾値」がどこかにあるのだろう。アンドロイドが実際の人間に似てくると、あるところからは親密さよりも脅威や恐れを感じることが知られている。いわゆる「不気味の谷」である。外見だけでなく能力や機能についても、不気味の谷に似た現象があるのだろう。

似ている度合いの量的な側面だけでなく、どのような性質で人間を凌駕しているかも大事だ。自動車が人より早く走り、飛行機が空を飛んだからといって、これらの機械が人間を凌駕したとは誰も思うまい。しかし、ホテルの受付でロボットが言葉をしゃべったり、囲碁や将棋でAIが勝ったりすると、途端に機械が人間を凌駕したと騒ぎ出す。

このような、機械や人工物に対して脅威を感じるポイントは、いつでもどこでも同じなのだろうか？　それとも、時代や文化により違いがあるのだろうか？　おそらく、ヒトとしての生物学的特性にもとづく普遍性がありつつ、文化的な違いがかなり大きいのではないかと睨んでいる。

人間誰しも、新しい人工物には忌避感を抱きがちだ。かつて消しゴム付き鉛筆が発明されたとき、イギリスの小学校では禁止令が出された（H. ペトロスキー『鉛筆と人間』晶文社）。今からしたら、なに考えてんだ？という感じだが、見慣れないものについての人間の反応とは、そういうものなのだろう。しかし消しゴム付き鉛筆も、時と共に普通のありふれた道具になっていった。

ロボットが消しゴム付き鉛筆のように社会に「なじむ」時代はいつごろ来るのだろうか？　意外と、近かったりするのかもしれない。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

UTokyo バリアフリー最前線!

第1回

差別解消法と「バリアフリー」

バリアフリー支援室特任助教　**中津真美**

平成28年4月に、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（以下、差別解消法）が施行されてから、ちょうど1年が経過しました。昨年度は、各部局の教授会を中心に、差別解消法への対応に関する研修会を50件ほど実施し、多くの教職員の方々にその趣旨をご理解いただくことができました。詳しくは、東京大学規則集「東京大学における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応要領」をご覧ください。これまでも、既に東京大学では、東京大学憲章で「全構成員が、国籍（中略）、障害等を理由に不当な差別を受けることなく、その個性と能力を十全に発揮しうる公正な教育・研究・労働環境の整備を図る」と宣言し、全国大学に先駆けてバリアフリー支援のための取り組みを進めてきましたが、これからは大学の理念と併せて法令遵守の観点からも、バリアフリー支援が促進されるという時代になりました。

ところで、なぜ東京大学では、「障害者支援」ではなく「バリアフリー支援」なのでしょうか。実は、この名称にこそ、バリアフリー支援室が発足当時から受け継いできた理念があります。バリアフリー支援という名称には、障害のある学生・教職員に対して、社会が築いているバリア（社会的障壁）こそが問題であるという認識が背景にあります。そうした障壁こそが問題なのであり「障害者」が問題なのではないという基本的な認識です。このことにより、施設・設備の改善、人的サポートの提供や支援機器の整備なども、特定の障害者個人のための支援というよりは、さまざまな条件を持った多様な人々がともに学ぶ大学を目指すという、大きな取り組みの一環であるという考え方ができます。

今後は、差別解消法と、なにより本学の基本理念をもって、誰もが参加できる豊かで活力ある「バリアフリーの東京大学」が、ますます進化することを願っています。

障害のある教職員との意見交換会を毎年開催しています。

バリアフリー支援室
ds.adm.u-tokyo.ac.jp

トピックス

全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
3月16日	広報室	世界の卒業生紹介 1 ／バイオロギングで動物の生態を解明する渡辺佑基さん	3月7日
3月16日	本部広報課	海洋研究の海に飛び込む　―第 8 回 UTokyo Research, on site―	3月9日
3月17日	史料編纂所	「木簡・くずし字解読システム―MOJIZO―」スマホ・タブレット版の公開に関するお知らせ	3月17日
3月17日	農学生命科学研究科・農学部	農学生命科学研究科難波成任教授と生産技術研究所荒川泰彦教授が日本学士院賞を受賞しました	3月13日
3月17日	産学協創推進本部	SXSW Interactive Innovation Awards を日本初受賞 – Todai To Texas 参加のロボット義足開発チーム「BionicM」（情報システム工学研究室）が快挙	3月14日
3月21日	本部博物館事業課	総合研究博物館本郷本館にて特別展示『赤門――溶姫御殿から東京大学へ』内覧会が開催される	3月17日
3月21日	史料編纂所	『中院一品記』『明国箚付（前田玄以宛）』の重要文化財指定について	3月10日
3月23日	本部人事給与課	東京大学初の「卓越教授」決定	3月22日
3月23日	本部総務課	平成 28 年度学位記授与式を挙行	3月23日
3月23日	広報室	世界の卒業生紹介 2 ／ゲーム理論の本場で准教授となった菅谷拓生さん	3月7日
3月24日	本部総務課	平成 28 年度卒業式を挙行	3月24日
3月27日	本部博物館事業課	総合研究博物館小石川分館 建築博物教室第 12 回の開催	2月25日
3月27日	農学生命科学研究科・農学部	附属演習林富士癒しの森研究所と山中湖村との間で地域交流に関する協定締結	3月7日
3月28日	リサーチ・アドミニストレーター推進室	東京大学リサーチ・アドミニストレーター認定授与式及び総長との懇談会	3月13日
3月28日	大学総合教育研究センター	若手新任教員のためのウェルカム・ワークショップを開催	3月17日
3月29日	国際本部	第 3 回戦略的パートナーシップシンポジウム開催	3月17日
3月30日	広報室	世界の卒業生紹介 3 ／日本と世界を本郷でつなぐ松本麻美さん	3月7日
3月31日	本部研究推進企画課	UTokyo BiblioPlaza - 東京大学教員の著作を著者自らが語る広場 -　公開	3月30日
4月3日	大学総合教育研究センター	English Academia ワークショップ「1 日で身につく！英語プレゼンのコツ！」開催	3月14日
4月5日	本部学生支援課	フィールドスタディ型政策協働プログラム設立記者会見	4月5日
4月6日	本部学術振興課	科学誌 "Nature Index 2017 Japan" にミュオグラフィ研究紹介記事を掲載	3月23日

お知らせ

全学ホームページの「お知らせ」等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
4月1日	広報室	部局長の交代のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/retirement_h29_j.html
4月1日	本部人材育成課	人事異動	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動

部局長交代のお知らせ

2017年4月1日付で下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記「お知らせ」のURLをご覧ください。

	新部局長	前部局長
大学院医学系研究科長・医学部長	**宮園浩平**	（再任）
大学院工学系研究科長・工学部長	**大久保達也**	光石 衛
大学院人文社会系研究科長･文学部長	**佐藤健二**	熊野純彦
大学院理学系研究科長・理学部長	**武田洋幸**	福田裕穂
大学院農学生命科学研究科長･農学部長	**丹下 健**	（再任）
大学院経済学研究科長・経済学部長	**持田信樹**	馬場 哲
大学院総合文化研究科長・教養学部長	**石田 淳**	小川桂一郎

	新部局長	前部局長
大学院教育学研究科長・教育学部長	**小玉重夫**	大桃敏行
大学院新領域創成科学研究科長	**三谷啓志**	味埜 俊
医科学研究所長	**村上善則**	（再任）
地震研究所長	**小原一成**	（再任）
東洋文化研究所長	**桝屋友子**	高見澤磨
分子細胞生物学研究所長	**白髭克彦**	秋山 徹
大気海洋研究所長	**津田 敦**	（再任）

CLOSE UP

フィールドスタディ型政策協働プログラムがスタート （本部学生支援課）

プログラムの英語表記はField Study Typed Policy Collaboration Program。略称は「FS」です。

社会が転換期にある今、多様な関係者と協力しながら政策を立案・実行する人材の育成は喫緊の課題です。そこで東京大学では、社会的課題にチャレンジするリーダー人材の育成のために「フィールドスタディ型政策協働プログラム」を開始します。このプログラムは、趣旨に賛同された「自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク」加盟の7地方自治体（青森県、石川県、福井県、長野県、三重県、鳥取県、高知県）の協力を得て可能となりました（山梨県、宮崎県も参加を検討中）。自治体からの課題に対し、学生が地域を奔走しながら現状を体験・把握し、課題解決に向けて考え、知見を有する教職員間も奔走しながら問題解決の糸口を探ります。事前調査、現地活動、事後調査を通じ、一年かけて解決の道筋の提案を行います。

プログラムの実施にあたり、4月5日に記者会見を開催。五神総長から趣旨説明があり、西川福井県知事、岡崎鳥取県東京本部本部長よりプログラムへの期待等が述べられました。

CLOSE UP

本学の教員が自著を紹介するホームページが誕生 （本部研究推進企画課）

UTokyo BiblioPlazaのトップ画面。
www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/

本学の教員の卓越性と多様性を示す著作物（書籍）を著者自らが紹介するUTokyo BiblioPlazaを公開しました。教員の研究を知ろうとするみなさんの導きとなる書棚であり、多様な学知の拡がりにふれるための広場です。どんな専門領域を学ぼうか考えている学生をはじめ、次世代をになうみなさんに、大学における知の卓越性や多様性を伝えることを目的に開設しました。学問の成果は、時間をかけて編まれた分厚い著作物として刊行されることも少なくありません。書いたひとたち自身が語るというかたちを基本に、著作物の内容とイメージを紹介しています。図書館で出会えたり、出版社から入手できるよう、関連する書誌情報も載せています。精読、速読、拾い読み、摘まみ読み、横断検索しての探し読み……、さまざまな読み方を試みてください。

平成28年度「東京大学総長賞」授与式を開催

本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著な団体・個人を対象とする学生表彰「東京大学総長賞」の授与式が、3月22日に小柴ホールで実施されました。

今回の「東京大学総長大賞」は、「防災トランプ」を開発し、楽しい防災で地域の絆を結ぶ防災まちづくり活動を行った福本塁さん（工学系研究科）、卒業論文「ウクライナ・ナショナリズムと国家の問題、1890-1918」が卒論の枠を超越した高水準の歴史研究と評価された村田優樹さん（人文社会系研究科）の2人が受賞しました。

「東京大学総長賞」は、課外活動・社会活動等の分野では、学問と医学教育事業の両立を高い水準で達成した三上貴浩さん（医学部）、第55回七大戦で本学を総合優勝に導いた東京大学運動会総務部、ハーバード大学及びアジア各国のトップ大学と卓越した国際交流活動を行ったHCAP東京大学運営委員会の3者が、受賞。学業分野では、①佐藤侑太郎さん（教養学部）、②坪山幸太郎さん（新領域創成科学研究科）、③村井翔悟さん（理学部）、④山下聖悟さん（学際情報学府）、⑤樊星さん（理学系研究科）、⑥宮田玲さん（教育学研究科）、⑦村井祐基さん（総合文化研究科）、⑧玉手亮多さん（工学系研究科）の8名が受賞しました（受賞内容：右表）。

皆さん、おめでとうございます。

多様性に富む総長賞受賞内容（学業分野:抜粋）

①ニホンザルにおける互恵的毛づくろい交換の要因を研究
②オートファゴソームの内膜分解に関する新モデルを提唱
③グラフ特徴量を高精度で推定するアルゴリズムを提示
④水泳体験を向上させる水中Virtual Reality環境を構築
⑤暗黒物質探求に向けてレーザーを用いた新実験を遂行
⑥実用的機械翻訳のためのオーサリングシステムを開発
⑦視覚世界の時空間的安定性を実現する脳の機構を研究
⑧生体膜の構造変形に倣った動的人工細胞モデルを構築

140周年特別展示「赤門――溶姫御殿から東京大学へ」開催中

東京大学創立140周年と加賀前田家本郷邸開設400周年。2つの大きな節目を記念する特別展示「赤門――溶姫御殿から東京大学へ」が、5月28日まで総合研究博物館で開催中です。近年著しく進展した本郷キャンパス埋蔵文化財の発掘、歴史文書の集成、そして本学所蔵資料の調査……。それらの成果をあわせ、江戸の終焉から東大の創設・発展の歴史を見守ってきた赤門の由来を知る絶好の機会です。関連企画として博物館7階ミューズホールで行われる連続講座では、5月6日に成瀬晃司先生（埋蔵文化材調査室）、20日には木下直之先生（人文社会系研究科）が登壇。13日には中島董一郎記念ホールにて「江戸藩邸と国元・金沢の食生活―動物考古学の研究成果から―」と題したシンポジウムも行われます。教職員なら知っておくべき東大のシンボルについての最新研究成果の数々を、ぜひその目でご覧ください。入館無料。開館は10～17時です（月曜休館）。www.um.u-tokyo.ac.jp/exhibition/2017akamon.html

◉五月祭のお知らせ／第90回五月祭が5月20日（土）・21日（日）に開催されます。今回のテーマは「つつむ、ひらく」。行けない場合は、4月1日に巨大化して本郷に襲来したと噂のめいちゃんのLINEスタンプを購入して応援する手もあります。

淡青評論

七徳堂鬼瓦

附属学校における論文指導

昨年4月に東京大学教育学部附属中等教育学校の学校長になり、二年の任期の一年目が終わりを迎えつつある。校長室から見えるグランドの姿にも慣れた。教育研究を専門としてきた者にとって、実践の場を経験することの意味は大きい。

東京大学の附属は中高一貫校として、一、二年では総合入門、三、四年では課題別学習、そして、高校の二、三年にあたる五、六年生は、卒業論文の執筆に向けた卒研を手がけている。大学での論文指導同様、一人の教員に何人かの生徒がつき、指導を受けている。

自らも論文指導を続けてきた者として、附属での論文指導は実に興味深い。大学での論文指導では、どこが「オリジナル」な学問的貢献のか、研究意義は何なのか、というような点が問題になり、指導した東大生の多くは、本や講義等の中から関心を見出してくる。

一方、附属の生徒のテーマを見ていると、確かに、大学生が取り上げそうなテーマ（例高齢者問題）もあるが、生活の中で直面した問題とか、「学問的か否か」の絞りを受けずに、広範囲から純粋な疑問が出てくる。

「アクティブ・ラーニング」等、今日の教育改革用語には横文字も多いが、違和感を感じることが少なくない。例えば、アメリカの高校でエッセー教育の指導を見る機会もあるが、そこで目指されているのは大学から降りてくる論文指導である。もともとアメリカの教育モデルではリベラルアーツの大学イメージが強く、大学の論文モデルは小学校まで降りてくる。基本的に非常に認知的な営みを軸としたアメリカ型教育を反映している。

一方、大学教育以前の日本の教育モデルの一つの特徴は、狭義の「勉強」以外を包括した全人的な教育志向を持つことである。論文指導もそれを反映する。「人と出会った」、「成長した」、「心の論文教育」というような卒業研究をめぐる附属での議論を聞きながら、高校生を対象とし、全人的な人間形成教育であるからこそでき、それでいて、より認知的な大学での論文指導での土台となるような指導が何かについて考えさせられる。あるいは、日本の大学の方が、むしろ全人的なエッセー教育から学ぶものがあるのかもしれない。

恒吉僚子
（教育学研究科）

東京大学広報室
no.1495 2017年4月24日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp